地域と歩む

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and Research Center
for Health and Welfare

聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター　年報

聖隷クリストファー大学

Community-Based Practice and Research Center
for Health and Welfare

保健福祉実践開発研究センター

年　報

地域貢献事業研究 報告書

第6号
2014

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

2014 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議
委員一覧 （所属、職位は 2014 年度時点）

センター長	小島 千枝子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授
副センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	入江 拓	看護学部看護学科 准教授
委員	入江 晶子	看護学部看護学科 准教授
委員	店村 眞知子	社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

2015 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議
委員一覧

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部看護学科 教授
委員	入江 晶子	看護学部看護学科 准教授
委員	佐野 仁美	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	大原 重洋	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

保健福祉実践開発研究センター年報
第6号（2014）

2015年11月1日発行

編集　聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター
発行　聖隷クリストファー大学
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-439-1400　FAX 053-439-1406
印刷　日興美術株式会社

ごあいさつ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター年報第 6 号（2014）の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

当センターの活動は、2015 年度の現在 7 年目に入っており、当年報では 2014 年度の実績を報告しております。

地域の実践現場とともに共同で行う「研究」に重点を置き、その研究成果を地域へ還元することを目的にした 2014 年度の地域貢献事業研究費の採択数は 6 件でした。2013 年度から、募集時に対象となる事業研究の考え方と 1 件あたりの配分上限額、および審査基準を明確にしたことで、今回もレベルの高い内容の事業研究と適切な配分ができたと考えております。この 6 件の事業研究の報告書は当年報に掲載しております。また、研究成果の報告会は例年 11 月に行われます聖灯祭・ホームカミングデー同日にポスター形式で行っており、地域の皆様や卒業生にご覧いただくと共に、採択された研究代表者によるプレゼンテーションも行います。

公開講座につきましては、時勢やニーズに合ったテーマ設定をし、テーマに応じた適切な集客目標を立てて、2014 年度は専門職向けの公開セミナーを 2 回、一般の方向けの公開講座を 2 回実施しました。公開講座ではテーマに沿って高名な講師をお招きし、ご講演をお願いしております。受講者数は年々増加して目標を超える集客ができ、受講者の満足度も高い結果が得られました。今後も引き続き、専門職向け、一般の方向けともに皆様のニーズに応えられる講座を開催していきます。

地域の専門団体や施設、行政から当センターへの講師や委員の派遣依頼は年々増加しており、地域で果たす本学の役割を拡大することにつながり、大変喜ばしいことと感じています。教員が、講師として派遣依頼に応じた実績は、ホームページでも公開しています。講師等の派遣につきましては、保健福祉実践開発研究センター事務局にお問い合わせください。

また、2014 年度は、「政策形成への関与」といたしまして、浜松市の保健医療福祉等の担当者との意見交換を行いました。これらを基に、今後どのように、保健福祉実践開発研究センターが、政策に関与できる可能性があるのか、引き続き検討してまいります。

これからも保健福祉実践開発研究センターが地域の皆様から必要とされ、“地域と歩む”実践・研究を続けてまいる所存です。皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2015 年 11 月

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
センター長　大場 義貴

目　　次

Ⅰ．2014 年度事業報告

1.　地域貢献事業研究　課題一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2.　公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

3.　研修会講師等派遣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

4.　保健医療福祉団体の委員等派遣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

5.　研究支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

6.　資　料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

Ⅱ．2014 年度地域貢献事業研究 報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

保健福祉実践開発研究センター運営会議　委員一覧

1. 地域貢献事業研究 課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2014 年度は計 8 件（区分 A:3 件、区分 B:5 件）、計 2,500,533 円の申請があり、保健福祉実践開発研究センターにおいて審議し、部長会の議決を経て執行役員会に報告し承認を得て、6 件、計 1,299,337 円の事業研究費を配分しました。研究課題 6 件の報告書を当年報（P.37 ～）に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

（区分）
A：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究
B：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

所属※	研究代表者	職位	区分	研究課題	対象地域	配分額（円）
社福	福田俊子	准教授	A	実習プログラムとスーパービジョンの有機的な連携のあり方	富士市及び浜松市	130,958
介護	横尾恵美子	教授	A	浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて	浜松市	222,649
リハ PT	吉本好延	准教授	A	官学連携による高齢者の介護予防事業の実践	浜松市	234,324
リハ PT	金原一宏	助教	B	地域在住者を支えるリハビリサポート体制の構築	浜松市北区、中区	278,516
リハ OT	田島明子	准教授	B	「浜松市で障害に対する差別をなくす条例づくり」の検討	浜松市	319,248
リハ OT	伊藤信寿	准教授	B	発達障害児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み	浜松市	113,642
					合計	1,299,337

※社福＝社会福祉学部社会福祉学科、介護＝社会福祉学部介護福祉学科、
リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、OT＝作業療法学科

＜地域貢献事業研究 報告会＞

2013 年度に地域貢献事業研究費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました。

日時：2014 年 11 月 1 日（土）10：00 ～ 15：00 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催
場所：聖隷クリストファー大学 1 号館 4 階 1409 中教室
発表：ポスター発表および口頭発表 来場者数：186 名

地域貢献事業研究費 2014 年度募集要項

保健福祉実践開発研究センター「地域貢献事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

1. 基本方針

保健福祉実践開発研究センターの柱のひとつである「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同研究・事業」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象とした事業研究費を募集します。

2. 対象となる研究および事業研究費の金額

本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、

A：地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B：地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

・実習先・就職先施設等と連携した研究であればなお望ましい。

・研究費の配分総額は 130 万円、**1 件当たり最大 40 万円です**（共同研究費とは上限額が異なります）。なお、地域貢献事業研究費の総額は、並行して募集する共同研究費の申請状況も考慮し、大学全体の研究費予算の枠内で柔軟に対応していきます。

（配分総額は、2014 年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります）

・配分対象の経費および単価基準は、「共同研究費取り扱い要領」の「7. 申請できる経費」に準じますのでご確認ください。要領と異なる取り扱いを希望する場合は、その理由と算出根拠を記載してください。

・配分された研究費の執行は、部長会で配分案が決定し、配分結果を通知した後からとなります。通知前の執行は認められませんのでご注意ください。

・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、IC レコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。

3. 対象期間

2014 年 4 月 1 月～ 2015 年 3 月 31 日

4. 研究成果の提出

・研究代表者は、研究期間内における研究課題の成果を取りまとめ、研究成果報告書を 2015 年 6 月末日までに保健福祉実践開発研究センターに提出してください。

・研究代表者は、保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

5. 審査の方法

保健福祉実践開発研究センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします（A・Bそれぞれ 15 点満点。絶対評価）。

項目	A	B
(1- A) 本学周辺地域の保健医療福祉の向上にどのように貢献できるか ＜5 点満点＞	○	—
(1- B) 本件が地域との基盤作り等である場合の将来展望 ＜5 点満点＞	—	○
(2) 研究計画・方法の妥当性 ＜5 点満点＞	○	○
(3) 申請経費の妥当性 ＜5 点満点＞	○	○

2. 公開講座

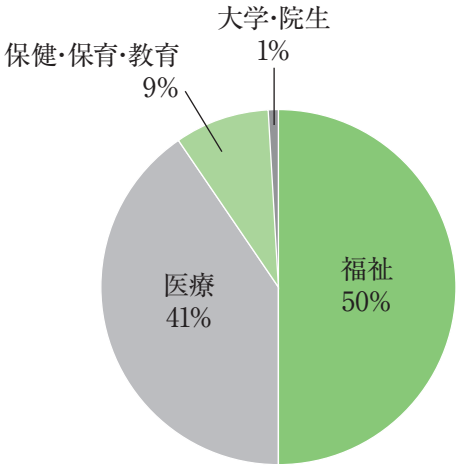
当センターでは、専門職向けの講座を「公開セミナー」、一般の方向けの講座を「公開講座」として毎年度開催しています。公開セミナーは本学教育の特徴である「IPW（専門職連携）」と「リーダーシップ」をテーマとし、公開講座は時勢やニーズに合わせたテーマを年度ごとに設定しています。2014 年度公開講座は地域の専門職の関心が高い「リーダーシップ」「発達障がい」および一般市民が参加しやすい「認知症予防」「モチベーションアップ」をテーマに実施しました。

1 公開セミナー①　リーダーシップに関する公開セミナー

1. 概要

タイトル：「対人援助の現場でいかす リーダーシップを磨こう！」
日時：2014 年 6 月 14 日（土）13 時 30 分～ 16 時 30 分
講師：生利 喜佐男 氏（コミュニケーション・ホーム喜舎代表・医療分野専門人材育成コンサルタント）
対象：保健医療福祉の専門職者他
参加者：定員 100 名 参加 123 名 申込 132 名（出席率 93.2%）
アンケート回収：116 件（回収率 94.3%）

2. 参加者職業内訳（合計 123 名）



福祉の専門職・・・介護福祉士、ユニットリーダー、ケアマネージャー、施設長、
機能訓練士、生活相談員など
医療の専門職・・・看護師、理学療法士、医師、医療事務など
保健、保育、教育の専門職、大学・大学院生

3. アンケート結果

設問１　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「リーダーシップについて学び、職場の雰囲気、仕事の効率を高められたらと思ったから」、「まとめる立場にあるので、スタッフのモチベーションを上げ、まとめて、リーダーシップがとれるコツやポイントを学びたい」など、日常の仕事に役立てたいと参加した方、また「コミュニケーションが原因でうまくいかない事が多々あり、少しでも解決への糸口を見つけたい」、「リーダーを行っている中で、メンバーとどう関わっていったらいいのか？リーダーの役割とは何か？どう動いていったらいいのか、戸惑い、分からなくなってしまったため」など、日頃からリーダーシップの在り方について悩んでいるという方々の声が全体の半数を占めました。

設問２・３　目的は達成できましたか？ その理由

94％の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答しました。「職場に戻って何をするべきか、何ができるか、具体的なやり方を学ぶ事ができた。」「日々の仕事の中に取り込める具体的な事が多かった。」、「自分の態度や行動を見直すきっかけとなることができた。」など、セミナーの内容に関して、ほとんどの参加者からとても勉強になったと前向きなコメントをいただきました。

設問４　今回の講座の感想

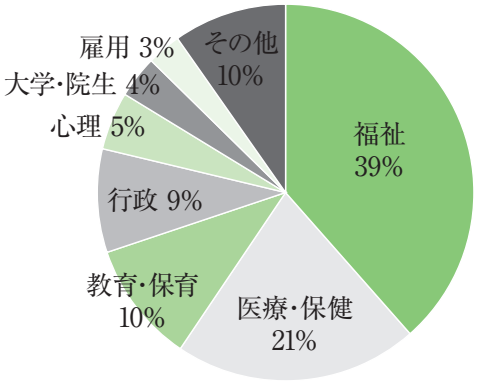
「話がおもしろく理解しやすかった。実在する人物や実例に基づき、話をされていた為、納得できた。」「様々な職種が集まり、良い刺激となった。」など、先生の講義手法の巧妙さに触れる方、多職種の専門職者が一堂に会して学ぶ機会の貴重さを感じた様子がうかがえました。また、「リーダーシップとはコミュニケーション技術が大きく関わることが分かった。」、「リーダーシップとヘッドシップを勘違いしていたのがわかって良かった。」、「明日からに活かせそう。演習もあったのですぐに行動できる気がする。」など、これからの実践につなげたいという意欲を持った方が多かったようです。

2　公開セミナー②　発達障害に関する公開セミナー

1. 概要

タイトル：「発達障がいを持つ人達の思春期、青年期の心理的支援・生活支援・就労支援
　　～多職種連携による地域支援ネットワークの展望～」
日時：2014 年 7 月 26 日（土）13：30 ～ 16：30
講師：進藤 義夫 氏（特定非営利活動法人 障害者支援情報センター 理事長）
シンポジスト：和田 里美 氏（医療法人社団至空会 ワークだんだん）【精神保健福祉士】
　　鈴木 厚志 氏（京丸園株式会社 園主）
　　内山 敏 氏（浜松市発達相談支援センタールピロ 所長）【臨床心理士・小児発達学博士】
コーディネーター：佐々木正和（本学社会福祉学部助教）
対象：保健・医療・福祉の専門職者
定員：100 名
参加：139 名
申込：177 名（出席率 84.8％）
アンケート回収：106 件（回収率 76.3％）

2. 参加者職業内訳（合計 139 名）



福祉の専門職…精神保健福祉士、相談員、生活支援員、
就労支援事業所、職業指導員、介護職、
ケアワーカー、相談支援専門員、社会福祉士、
訪問介護員、児童厚生員、他

医療・保健…　看護師、保健師、助産師、作業療法士、薬剤師、
児童精神科精神保健福祉士、小児看護専門看護師、他

教育・保育…　小中高大教員、養護教諭、人材開発担当、
特別支援学校進路指導、保育士

行政の専門職…行政職員、ソーシャルワーカー、養護教諭、
小中高大教員、特別支援学校進路指導、他

心理の専門職…カウンセラー、スクールカウンセラー、
臨床心理士、児童心理士、他

3. アンケート結果

設問１　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

半数以上の方が「発達障がい者と関わる仕事をしている（する予定の）ため、今後に役立てたい」という目的で参加されたことが分かりました。また、「発達障がいを持つ方の特性を理解したいと思ったから」、「発達障がいについてさらなる理解と支援の方法を学びたかった」「身内（自身を含む）に発達障がい児をもつため、今後に役立てたい」など、事例から具体的な方法を学んで実際にに活かしたいと考えて参加された方が多いこともうかがえました。

設問２・３　目的は達成できましたか？ その理由

80％の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答されました。「多職種連携の大切さを知り、医療・福祉のコーディネートが利用者さんにとってとても必要なことだと改めて実感しました」、「多くの事例を知ることで、どのような支援（対応）が必要かを再確認できた」、「支援についていろいろな機関があることが分かった」という意見が聞かれました。

設問４　今回の講座の感想

「お話が分かりやすく、具体的な事例もたくさん出て、自分にも明日からできることがあると気付くことができた」、「支援を楽しむことが大切だと思った」など、たくさんの専門職の方に学びと気付き、そして励ましがあったことがうかがえました。また発達障がいの当事者の方やご家族の方からも「子供に対して持っていた疑問が少し理解ができた」、「相談に行く窓口を知る事ができ、考え方もヒントをもらうことができた」などの声をいただきました。

3 公開講座①　認知症予防に関する公開講座（全３回）

1. 概要

タイトル：「認知症を予防しよう」

各回テーマ・日時・講師：

	第１回	第２回	第３回
テーマ	認知症を知ろう	認知症予防！認知症 リハビリテーション	認知症予防とアロマセラピー
日付	９月４日（木）	９月６日（土）	９月11日（木）
時間	13：30 ～ 15：00	13：30 ～ 15：00	13：30 ～ 15：00
講師	聖隷三方原病院 浜松市認知症疾患医療センター センター長　磯貝 聡 氏	リハビリテーション学部 作業療法学科　建木 健 助教	看護学部　村松美恵 助教、 講師支援：助産学専攻科 非常勤講師　大石恵美子 氏

対象：一般の方（主にご高齢の方）

定員：各回 50 名⇒好評につき第１・２回を 100 名・第３回を 80 名まで増やしました。

【全３回延べ】参加：247 名 申込：295 名（出席率 83.7%）

【第１回】参加：87 名 申込：106 名（出席率 82.1%）

【第２回】参加：88 名 申込：100 名（出席率 88.0%）

【第３回】参加：72 名 申込：89 名（出席率 80.9%）

アンケート回収：

【第１回】71 件（回収率 81.6%）

【第２回】65 件（回収率 73.9%）

【第３回】48 件（回収率 66.7%）

2. 参加者（合計 124 名）

内訳：男性 33 名、女性 91 名

平均年齢：60.74 歳

3. アンケート結果

設問１　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「最近物忘れが増え、認知症に対する不安感がある」、「自分は認知症になって周りに迷惑かけたくない」という自らの予防のため、「母の認知症の発症により、病気について知りたいと思ったから」、「妻が初期認知症であるため」など、認知症に対する知識を深めてご家族の介護に役立てたいという方、「介護の仕事をしているため、認知症に対しての知識を深めたいと思った」など、職場で活かしたいという方々の声がありました。第３回は、「介護の現場でアロマセラピーを導入したい。そのために必要な知識を得たい」など、現在アロマセラピーを行っている方や今後取り入れたいと考えている方が多く参加していることが分かりました。

設問２・３　目的は達成できましたか？ その理由

第１・２回は 80%以上の方が、第３回についても 61%の方が「達成できた」と回答しました。
理由としては､「アルツハイマー型認知症についてとてもよく理解できた」､「生活習慣病の注意事項など参考になった」など、具体的な事案が聞けて分かり易かったことについて満足の声が多くありました。（第１回）

「今後の生活態度に目標を持てた」､「ケア、関わり方を学べた。考え方で接し方が大いに変わると思った」､「認知症の人に対しての関わり方を具体的に教えていただきとても勉強になった」など、回を重ねて認知症のことがより深く理解できたという声が多くありました。（第２回）

「精油も種類がたくさんあるので、選ぶのに迷う事があるが、今回は認知症予防やリフレッシュに重点をおいて紹介されていた為、勉強になった」､「香りの効果が認知症を看護している人にも良い。良い香りで脳に刺激を与える事が予防につながるという事が良かった」などの声のほか、「もう少し具体的な方法･内容を聞きたかった」､「アロマ使用前後のデータなどを出してほしかった」などの声も挙がりました。（第３回）

設問４　今回の講座の感想

「講義内容がわかりやすく、理解を深めることができた」､「参加してよかった」､「次回以降、具体的な話が聞けるのが楽しみである」（第１回）

「分かりやすい説明だった。ビデオも良かった」､「今後の生活行動に活かしたい」､「仕事に役立てたい」（第２回）

「アロマの基礎が学べて良かった。たくさんの香りを体験できて良かった」､「日常生活に取り入れていきたい」などの感想が聞かれました。（第３回）

4　公開講座②　モチベーションに関する公開講座

1. 概要

タイトル ：「ハードルを越える」
日時：2014 年 11 月 1 日（土） 13：00 ～ 14：00
講師：為末 大 氏（一般社団法人アスリート・ソサエティ 代表理事）
対象：一般の方
定員：先着 400 名

元陸上競技選手で 400 mハードル日本記録保持者の為末大氏を講師にお迎えし、ご自身の経験を踏まえて、挑戦することの大切さや壁にぶつかった時の対処法、モチベーションの保ち方などについてご講演をいただきました。一般の方、本学学生、卒業生、修了生および教職員など約 360 名が聴講しました。

3. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

※合計 121 件／担当教員の所属・職位は 2014 年度当時

1 専門職対象

No	主催	内容	担当
1	静岡県 公益社団法人 静岡県看護協会	平成 26 年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：研究方法＜量的＞ 対　象：看護師養成所専任教員等	看護学部 渡邉順子 教授
2	独立行政法人 労働者健康福祉機構 浜松労災病院	平成 26 年度看護研究の指導・講義 テーマ：看護研究の基本レクチャー、研究テーマの絞り込み、看護研究ガイダンス、文献クリティーク等 対　象：看護師	看護学部 渡邉順子 教授
3	静岡県看護協会	公益社団法人静岡県看護協会 テーマ：看護教員養成プログラムの検討および精神看護学特別演習の内容、方法の検討 対　象：看護教員を目指す専門職等	看護学部 入江 拓 准教授
4	掛川市・袋井市病院 企業団立 中東遠総合医療センター	看護研究指導 テーマ：看護研究指導 対　象：看護師	看護学部 宇城 令 准教授
5	NPO 法人 がん情報局	第 7 回 浜松がん看護フォーラム 21 テーマ：基礎から学ぼう乳がん看護～再発治療編～「危機の分析と看護介入～乳がん再発時の患者の心理」 対　象：看護師	看護学部 樺澤三奈子 准教授
6	医療法人社団リラ 溝口病院	平成 26 年度新任者研修 テーマ：精神科看護基礎講義 対　象：新任看護師、看護助手	看護学部 清水隆裕 助教
7	医療法人社団リラ 溝口病院	院内研修会 テーマ：精神科における薬物療法と看護 対　象：看護師	看護学部 清水隆裕 助教
8	医療法人社団種光会 朝山病院	看護研究・症例検討発表会 テーマ：発表に対する講評 対　象：看護師・看護補助者・PSW	看護学部 清水隆裕 助教
9	好生会三方原病院	院内研修会 テーマ：精神疾患の患者がなぜ多く水を飲むのかその原因と対応についての心理的要因 対　象：好生会三方原病院・佐鳴湖病院・神経科浜松病院・浜北病院の看護師	看護学部 清水隆裕 助教
10	聖隷三方原病院	精神科看護の研修会 テーマ：精神力動学的な疾患の理解と看護 対　象：精神科看護に関わる看護師及び聖隷福祉事業団関連施設の看護師	看護学部 清水隆裕 助教
11	静岡県立 東部看護専門学校	看護教員対象教務課夏季研修会 テーマ：看護学生をほめて育てる技術とことば～ほめ言葉創出体験ワーク 対　象：看護教員	看護学部 高橋佐和子 助教 伊藤純子 助教

No	主催	内容	担当
12	静岡大学 教員免許更新講習企画室	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：養護教諭の専門性とその成長 対　象：教員	看護学部 高橋佐和子 助教
13	小山町養護教諭部	小山町養護教諭部研修会 テーマ：養護活動の記録について 対　象：小山町養護教諭	看護学部 高橋佐和子 助教
14	静岡県（公益社団法人 静岡県看護協会）	平成 26 年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：看護教育課程論　助産師課程 対　象：看護師養成所専任教員等	助産学専攻科 久保田君枝 教授
15	医療法人好生会 はまかぜ	研究指導 テーマ：研究発表指導相談支援事業における 事業所集約化の効果 対　象：施設職員（精神保健福祉士）	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
16	静岡県司法書士会 浜松支部	平成 25 年度静岡県司法書士浜松支部総会 テーマ：浜松市自作対策地域連携プロジェクト （絆プロジェクト）の説明 対　象：浜松市内の司法書士	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
17	浜松医科大学医学部	マンデークラブ（医局勉強会） テーマ：「ひきこもり支援」に関する特別講演および 研究の打ち合わせ 対　象：医師、臨床心理士	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
18	浜松市社会福祉協議会	福祉教育担当者連絡会 テーマ：学校だけの福祉教育ではなく、地域や関係 機関とのつながりの必要性や閉じこもりについて 対　象：浜松市中区・南区の小中学校のボランティア および福祉教育担当教員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
19	日本児童青年精神医学会	第 55 回日本児童青年精神医学会総会 テーマ：シンポジウム「引きこもり・不登校」 対　象：医療関連の専門職等	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
20	静岡県臨床心理士会	西部地区 SC 研修会　平成 26 年度第 3 回単独研修会 テーマ：事例検討会 ～ SC と SSW が連携をはかったケースについて～ 対　象：県内スクールカウンセラー	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
21	社会福祉法人ひかりの園	職員研修 テーマ：知的障害者の愛着に関する講義 「愛着障害、アタッチメント理論について、 利用者の愛着とこだわりについて」 対　象：職員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
22	浜松市 精神保健福祉センター	自殺未遂者支援事業　研修会 テーマ：浜松市自殺対策地域連携プロジェクトに ついての紹介　シンポジウムへの出席 対　象：救急医療職員、精神科医療職員、 行政職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
23	浜松市障害保健福祉課	平成 26 年度浜松市障害者虐待防止研修会 テーマ：『自分自身の「あやうさ」をどう受け止め 共有するか』～不適切な対応が生じる構造を理解し、 自分を取り巻く環境を整える～ 対　象：新人から中堅職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授

No	主催	内容	担当
24	浜松市社会福祉協議会	企業の地域福祉型社会貢献（CSR）セミナー テーマ：概論：地域に求められている企業 対　象：浜松市内の企業及び事業主の担当職員など	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
25	社会福祉協議会 北地区センター	浜松市北区民生委員児童委員協議会全員研修会 テーマ：「社会福祉」にたずさわるということ −さまざまな「人」と「生活課題」を理解するために− 対　象：北区管内民生委員児童委員 （主任児童委員含む）	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
26	浜松市障害保健福祉課	虐待防止研修会 テーマ：私たちの専門性を再確認しよう！ ～多職種・専門職連携の前提に欠かせないものは～ 対　象：行政職員、障害者相談支援事業所、 地域包括支援センター職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
27	浜松市北区役所	平成 26 年度第 2 回北区事業者情報連絡会 テーマ：私たちの地域で認知症の人々を支えるには？ 対　象：北区内介護保険サービス事業者、 医療相談室、在宅介護支援センター等職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
28	浜松市社会福祉協議会	平成 26 年度　コミュニティソーシャルワーク研修会 テーマ：コミュニティソーシャルワークについて 対　象：浜松市社会福祉協議会職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
29	社会福祉法人 小羊学園	平成 26 年度西部地区施設連絡会研修会 テーマ：障がいのある方々の地域生活を考える 対　象：西部地区社会福祉施設職員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 准教授
30	浜松市西区社会福祉課	西区民生委員・児童委員、主任児童委員研修会 テーマ：民生委員活動について 対　象：浜松市西区民生委員児童委員、 主任児童委員、福祉関係者	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 准教授
31	社会福祉法人 慶成会 グループホーム花みずき	第 2・3 回運営推進会議 テーマ：認知症の方が暮らすグループホームの現状について知り、課題についての意見交換を行う 対　象：地域からの運営委員	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
32	アドナイ館	職員研修会 テーマ：認知症の理解と対応 対　象：アドナイ館職員	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
33	全国福祉 レクリエーション・ ネットワーク	全国福祉レクリエーション・ネットワーク 東海北陸ブロックセミナー テーマ：笑顔いっぱい、笑いあふれる福祉現場を創る 対　象：福祉レクリエーション・ワーカー、 福祉現場職員等	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
34	地域包括支援センター 細江	平成 26 年度地域包括支援センター 細江ケアマネージャー演習事業 テーマ：相談援助～地域につながる 対　象：北区内をサービス提供エリアにしている 事業所の介護支援専門員及び関連施設に勤務する 介護支援専門員	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授

No	主催	内容	担当
35	静岡県高等学校 福祉教育研究会	平成 26 年度静岡県高等学校福祉教育研修会 テーマ：講義・グループワーク事例で考えよう ～ある村の 5 人の登場人物のお話～ 対　象：静岡県内の国公私立高校で福祉を教えている教員（新卒からベテランまで）	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
36	一般社団法人 静岡県社会福祉士会	平成 26 年度一般社団法人静岡県社会福祉士会 西部支部定例会 テーマ：ソーシャルワーカーに求められる権利擁護の視点とは 対　象：静岡県社会福祉士会西部支部会員	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
37	浜松市介護サービス 事業者連絡協議会	浜松市介護サービス事業者連絡協議会 施設系部会研修会 テーマ：私たちの職場が、医療・介護職が定着し、育つ場となるために ～医療・介護職養成機から現場に期待すること～ 対　象：浜松市介護サービス事業者連絡協議会会員	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
38	磐田市福祉課 高齢者福祉グループ	高齢者虐待防止に関する講演会 テーマ：高齢者虐待に関する連携について 対　象：磐田市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員（民生委員、人権擁護委員、自治会役員等）	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
39	磐田市ケアマネ連絡会	ケアマネ対象研修会 テーマ：伝える力 ・高齢者に分かりやすい伝え方 ・違う意見の伝え方　等 対　象：ケアマネージャーや介護保険事業所勤務のスタッフ等	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
40	静岡県ホームヘルパー 連絡協議会	平成 26 年度静岡県ホームヘルパー連絡協議会一般研修会 テーマ：ホームヘルパーの職業倫理・マナーを考えるサービス向上のため、記録の見直しを行う 対　象：県内ホームヘルパー	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
41	社会福祉法人 掛川社会福祉事業会	掛川社会福祉事業会職員研修 テーマ：社会福祉事業従事者に求められる倫理と専門性 対　象：施設サービス部門と在宅サービス部門に係る全職員（介護職・看護師・保健師・ソーシャルワーカー・社会福祉士等。パート職員含む）	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
42	一般社団法人 静岡県社会福祉士会	平成 27 年度介護福祉士ファーストステップ研修 テーマ：コミュニケーション技術の応用的な展開（1） 対　象：基礎的業務に習熟し、資格修得後、実務年数 2 年以上経過している者及び初任者研修を終了している者	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
43	地域包括支援センター 細江	平成 26 年度地域包括支援センター 細江ケアマネージャー演習事業 テーマ：自立を考える～自立支援の見える化～ 対　象：北区内をサービス提供エリアにしている事業所の介護支援専門員及び関連施設に勤務する介護支援専門員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教

No	主催	内容	担当
44	社会福祉法人 静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 26 年度新任職員研修Ⅰ（西部） テーマ：福祉サービスの理念・動向と新任職員への期待、演習新任職員の役割行動 （理解促進テストとグループ討議） 対　象：静岡県西部地区福祉専門職および業務経験年数 2 年未満の職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
45	御前崎市役所 高齢者支援課	御前崎市介護支援専門連絡会事例検討会 テーマ：事例検討を通して居宅介護支援専門員の資質向上を図る 対　象：御前崎市民担当の居宅介護支援専門員（近隣地域含む）	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
46	静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 26 年度　福祉職員生涯研修課程指導者会議 テーマ：キャリアパス対応生涯研修課程（新カリキュラム）導入について　他 対　象：平成 26 年度福祉職員研修課程指導者	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
47	デンマーク牧場福祉会	職員対象研修会 テーマ：認知症高齢者の理解と対人援助技術 対　象：介護職員、看護職員、事務員、ケアマネージャー	社会福祉学部 介護福祉学科 佐野仁美 助教
48	浜松市立北部中学校	教職員研修 テーマ：学校の危機管理について ～保護者や外部との対応の仕方～ 対　象：教職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子 教授
49	浜松市きらめき研究会	養護教諭対事例検討会 テーマ：各校で苦慮している事例への対応・小・中学校の養護教諭としてできること 対　象：市内小・中学校の養護教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子 教授
50	磐田市こども部	平成 26 年度第 1 回初任者研修会 テーマ：幼児教育関係法令及び幼稚園教育課程、保育園保育課程をふまえた保育実践 対　象：磐田市公立幼稚園保育園採用 3 年目までの職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
51	聖隷福祉事業団	聖隷保育学会 テーマ：実践研究発表会 研究内容についての助言と講義 対　象：聖隷福祉事業団全保育施設	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
52	浜松市教育委員会	平成 26 年度第 1 回新任園長・校長研修 テーマ：園長としての心構え 対　象：浜松市立幼稚園の新任園長	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 助教
53	浜松市教育委員会	平成 26 年度免許状更新講習 テーマ：幼児期における教育 対　象：教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 助教
54	磐田市こども部	平成 26 年度主任会 テーマ：主任としての役割 対　象：磐田市公立幼稚園・保育園主任	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 助教

No	主催	内容	担当
55	浜松市立天竜区 佐久間地区教育研修会	佐久間地区幼少中一貫教育研修 テーマ：幼児期における好ましい人間関係 対　象：幼稚園・小中学校教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 助教
56	静岡市立保育園保育士会	静岡市立保育園保育士会研修会 テーマ：保育の中の教育を考える 対　象：静岡市公立保育園　園長、副園長、保育士	社会福祉学部 こども教育福祉学科 細田直哉 助教
57	浜松市 リハビリテーション病院	栄養・褥瘡対策委員会勉強会 テーマ：褥瘡対策のためのポジショニング・ シーティング 対　象：浜松市リハビリテーション病院職員	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
58	静岡県理学療法士会	研修会　教育局　新人教育部　新人教育プログラム テーマ：新人教育プログラムB－3「統計方法論」 対　象：理学療法士新人教育プログラム履修者	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋誠 助教
59	磐田市こども部 子育て支援課	平成 26 年度発達支援ほっと研修 テーマ：①講義「運動の発達」②園実習 対　象：磐田市内の幼稚園保育園の主任級職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
60	静岡大学 教員免許更新講習企画室	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：作業療法からみた発達障害の理解と支援について 対　象：教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
61	静岡県教育委員会	教員への指導・助言 テーマ：児童生徒に対する指導内容等に関する 相談を受け、教員に対し指導助言を行う 対　象：教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
62	静岡県立 浜松特別支援学校	特別支援教育講座 テーマ：OT から見た支援 対　象：保育園、幼稚園、小中学校、高等学校の 教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
63	日本健康科学学会	日本健康科学学会第 30 回学術大会 テーマ：教育講演Ⅱ 「摂食・嚥下障害者へのアプローチの実際」 対　象：学会会員、学生、各種医療関係者等	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 小島千枝子 教授
64	磐田市こども部 子育て支援課	平成 26 年度発達支援ほっと研修 テーマ：①講義「ことばの発達」②園実習 対　象：磐田市内の幼稚園保育園の主任級職員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
65	浜松市教育委員会	平成 26 年度通級教室指導者研修【言語】 テーマ：通級指導教室での言語指導について 対　象：通級指導教室担当教員および希望者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
66	静岡県立 浜名特別支援学校	ST（言語）研修会 テーマ：子どものことばの発達と支援 対　象：教職員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授

2 一般の方対象

No	主催	内容	担当
1	浜松市社会福祉協議会 浜北地区センター	赤佐地区社会福祉協議会出前講座 テーマ：自分はまだ大丈夫?生活習慣病 対　象：地域の自治会役員、民生委員、 ボランティアの方々	看護学部 木下幸代 教授
2	社会福祉法人 静岡市社会福祉協議会· 静岡市静岡中央子育て 支援センター	子育て講座乳幼児の事故防止 テーマ：子どもに起こりやすい事故やけがの対処等 対　象：乳幼児の親	看護学部 宮谷　恵 准教授
3	浜松市立熊切小学校	学校保健委員会 テーマ：講話と実技　「思いを上手に伝えよう」 対　象：4 年生 6 名、6 年生 7 名、PTA 役員、 教職員	看護学部 高橋佐和子 助教
4	浜松市立気田小学校	学校保健委員会 テーマ：思いをじょうずに伝えよう 対　象：5 年 19 名、6 年 14 名、教職員、保護者	看護学部 高橋佐和子 助教
5 〜 28	（24 校） 浜松市立二俣小学校、 浜松市犬居小学校、 静岡市立麻機小学校、 浜松市立北浜東部中学校、 静岡市立西奈小学校、 浜松市立麁玉小学校、 浜松市立内野小学校、 浜松市立井伊谷小学校、 浜松市立奥山小学校、 浜松市立引佐南部中学校、 浜松市立金指小学校、 浜松市立都田小学校、 浜松市立細江中学校、 浜松市立都田中学校、 浜松市立中郡小学校、 浜松市立湖東中学校、 浜松市立三方原中学校、 御殿場市立富士岡中学校、 浜松市立大瀬小学校、 浜松市立麁玉中学校、 浜松市立都田南小学校、 浜松市立伊目小学校、 浜松市立細江中学校、 浜松市立湖東中学校	県内小中学校で実施する健康教育の講演会 テーマ：体と心が健康であるために、生活リズムを 見直そう、思いを上手に伝えよう、睡眠について、 素敵な言葉で元気になろう、命を大切にしよう、 自分を大切にしよう、男女交際と性教育等 対　象：児童生徒、保護者、教職員	看護学部 高橋佐和子 助教 伊藤純子 助教
29	社会福祉法人　明和会	平成 26 年度社会福祉法人明和会「福祉研修会」 テーマ：基調講演『「素人性」から生成する実践 −支援の場で生起している「かかわり」を問い直す−』 対　象：明和会職員、地域住民	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
30	社会福祉法人　明和会	平成 26 年度社会福祉法人明和会「福祉研修会」 テーマ：「素人性」から生成する実践 −支援の場で生起している「かかわり」を問い直す 対　象：明和会職員、地域住民	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授

No	主催	内容	担当
31	藤枝市役所自立支援課	精神保健福祉講座 テーマ：精神疾患の理解、精神障害者への支援 対　象：地域の民生委員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
32	特定非営利活動法人 てくてく	てくてく学習会 テーマ：ひきこもり支援の地域連携（医療・行政） 対　象：てくてく会員・ひきこもり当事者ほか	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
33	浜松市 浜松手をつなぐ育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：思春期・青年期のメンタルヘルス 対　象：高校生以上の学生	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
34	静岡県母親大会連絡会	第 52 回静岡県母親大会 テーマ：分科会老後を安心して暮らすために 介護保険が変わったら要支援（軽度認定者）は 切捨て？介護労働者の職場は確保されるの？ 対　象：一般女性	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
35	介護・医療と社会保障を 考える市民の会	学習講演会 テーマ：誰もが安心して暮らせる社会保障制度に ～今日の医療・介護制作の論点と私たちの課題～ 対　象：一般の方ほか	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
36	社会福祉法人　慶成会	法人職員研修会 テーマ：高齢者の介護における自立支援 対　象：法人施設職員	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
37	社会福祉法人 富士市社会福祉協議会	成年後見制度講演会 テーマ：成年後見制度を取り巻く現状と課題 対　象：一般の方	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
38	社会福祉法人 富士市社会福祉協議会	富士市成年後見制度講演会 テーマ：成年後見制度を取り巻く現状と課題 対　象：一般の方	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
39	富士市社会福祉協議会	市民後見人育成研修 テーマ：市民後見概論 ・市民後見人が生まれてきた背景 ・市民後見人としての社会規範、倫理性 ・市民後見人の職務と役割 対　象：一般市民	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
40	浜松市高台協働センター	高台女性学級 テーマ：自力で歩き続けましょう 対　象：60 ～ 80 歳の女性	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
41	浜松市北部協働センター	生きがいづくり教室『北部ゆうゆう倶楽部』 テーマ：認知症にかからない心の持ち方 対　象：60 代後半	社会福祉学部 介護福祉学科 佐野仁美 助教
42	浜松市史蹟調査顕彰会	記念館アカデミー講座 テーマ：平安文学の世界（全 3 回） 対　象：高校生以上の一般市民	社会福祉学部 こども教育福祉学科 渡辺泰宏 教授

No	主催	内容	担当
43	株式会社静岡新聞 SBS 学苑	SBS 学苑市民向け講座 テーマ：『伊勢物語』を読む～ 恋の物語と在原業平と 対　象：一般市民	社会福祉学部 こども教育福祉学科 渡辺泰宏 教授
44	浜松市教育委員会	家庭教育講座 テーマ：小学校入学に向けて考えたい家庭教育の在り方 対　象：平成 27 年度浜松市立県居小学校入学予定児童保護者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 助教
45	社会福祉法人 十字の園 トレーニング型 デイサービス ぷらすワン	健康ぷらすワン講座 テーマ：栄養からみた健康づくりについて 対　象：細江町・引佐町・三方原町に在住の方	リハビリテーション学部 理学療法学科 西田裕介 教授 田中真希 助教
46	浜松市健康福祉部	呼吸器教室 テーマ：呼吸器の実技指導およびグループワーク 対　象：一般市民	リハビリテーション学部 理学療法学科 有薗信一 准教授
47	静岡県立 浜松湖南高等学校	進路講演会 テーマ：リハビリテーションとは理学療法と作業療法の違い 対　象：医学系学部希望者	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
48	浜北保健センター	健康づくり連絡会 テーマ：介護予防として、筋力トレーニング、呼吸トレーニングなどについて 対　象：食育や健康づくり『健やか』のボランティアの方々	リハビリテーション学部 理学療法学科 田中真希 助教
49	連合静岡東遠地域協議会	全国安全週間関連行事： 勤労者が健康的に働くための研修会 テーマ：身体を整える - 筋・関節のはたらきと健康 - 対　象：連合静岡東遠地域協議会所属の勤労者	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋誠 助教
50	静岡県理学療法士会	静岡県理学療法士会介護予防市民セミナー 「介護予防キャラバン」 テーマ：体力測定及び結果説明・運動指導 対　象：一般市民	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋誠　助教
51	老人福祉センター萩原荘	転倒予防教室（元気はつらつ教室） テーマ：高齢者の運動機能低下および認知症予防を目的とした指導教室 対　象：地域の高齢者	リハビリテーション学部 理学療法学科 理学療法学科教員７名
52	静岡県立 浜松特別支援学校	特別支援教育講座 テーマ：児童生徒の発達支援と教員指導 対　象：児童生徒、教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
53	NPO 法人　Harmony	介護員の腰痛予防の為の講座 テーマ：講義「介護員の腰痛予防」および演習 対　象：NPO 法人 Harmony 事業所従業員	リハビリテーション学部 作業療法学科 鈴木達也 助教

No	主催	内容	担当
54	浜松市根洗学園	父親研修会 テーマ：ことばの発達について （日頃で意識できるポイント等） 対　象：利用時の父親	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 　池田泰子 准教授
55	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座 テーマ：手話奉仕員養成講座入門課程講義 聴覚障害者の基礎知識 対　象：一般市民	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 　石津希代子 准教授

4. 保健医療福祉団体の委員等派遣

※担当教員の所属・職位は 2014 年度当時

No	内容	担当
1	静岡県医療審議会　委員 任期：2013 年 9 月 1 日～ 2015 年 8 月 31 日 主催：静岡県	看護学部 川村佐和子 教授
2	平成 26 年度静岡県専任教員養成講習会実行委員会　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：静岡県	看護学部 酒井昌子 教授
3	牧之原市健康づくり推進協議会　委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：牧之原市	看護学部 鈴木知代 教授
4	浜松市国民健康保険運営協議会　委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	看護学部 入江晶子 准教授
5	浜松市地域包括支援センター運営協議会　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2017 年 3 月 31 日（年 3 ～ 5 回） 主催：浜松市	看護学部 入江晶子 准教授
6	浜松十字の園・アドナイ館・第 2 アドナイ館　第三者委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人　十字の園	看護学部 野崎玲子 准教授
7	浜松市介護認定審査会　委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	看護学部 篁　宗一 教授 野崎玲子 准教授 小池武嗣 助教 伊藤純子 助教 リハビリテーション学部 西田裕介 教授 鈴木達也 助教 中村哲也 助教
8	浜松市精神保健福祉審議会　委員 任期：2013 年 7 月 1 日～ 2015 年 6 月 30 日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
9	浜松市不登校児支援協議会　会長および適応指導教室スーパーバイザー 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
10	平成 26 年度浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会　委員 任期：2014 年 6 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
11	総合支援検討会・勉強会　アドバイザー 任期：2014 年 6 月～ 2015 年 1 月（毎月第一金曜・計 8 回） 主催：浜松市パーソナル・サポート・センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
12	平成 26 年度子ども・若者支援スーパーバイザー 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市青少年育成センター（浜松市こども家庭部）	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授 佐々木正和 助教 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授

No	内容	担当
13	日常生活自立支援事業契約締結委員会 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
14	浜松の精神保健福祉を考える官民協働ワーキンググループ　アドバイザー 任期：2014 年 5 月 23 日～ 2015 年 3 月 31 日（月 1 回程度） 主催：浜松市精神保健福祉センター	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
15	浜松市福祉人材バンク運営委員会　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
16	静岡県福祉サービス第三者評価推進委員会　委員 任期：2014 年 8 月 19 日～ 2016 年 8 月 18 日 主催：静岡県健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
17	浜松市高齢者虐待防止支援事業　アドバイザー 任期：2014 年 7 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
18	浜松市人権施策推進審議会　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日（年 3 回程度） 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
19	浜松市ユニバーサルデザイン審議会　委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
20	浜松市営住宅管理運営委員会　委員 任期：2013 年 7 月 1 日～ 2015 年 6 月 30 日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
21	浜松市社会福祉審議会および福祉有償運送運営協議会　委員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
22	浜松市障害者虐待防止対策支援事業　アドバイザー 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
23	社会福祉法人七恵会　評議員 任期：2013 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人　七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
24	社会福祉法人みどりの樹　評議員 任期：2013 年 6 月 30 日～ 2015 年 6 月 29 日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
25	NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会　監事 任期：2013 年 6 月 27 日～ 2015 年 6 月 26 日 主催：NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
26	地域密着型介護老人福祉施設和合愛光園和合サテライト運営推進会議　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日（2 ヶ月に 1 回） 主催：社会福祉法人 聖隷福祉事業団 特別養護老人ホーム　和合愛光園	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教

No	内容	担当
27	第三長上苑主催運営推進会議　委員 任期：2014 年 5 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日（2 ヶ月に 1 回） 主催：社会福祉法人　七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 　落合克能 助教
28	地域貢献推進部会（CSW 研修ワーキンググループ）アドバイザー 日程：2014 年 8 月 4 日（月）・8 月 21 日（月） 主催：静岡県社会福祉法人経営者協議会	社会福祉学部 介護福祉学科 　落合克能 助教
29	法人役員　監事 任期：2013 年 6 月 27 日～ 2015 年 6 月 26 日（年 1 ～ 2 回） 主催：NPO 法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-jan）	社会福祉学部 介護福祉学科 　落合克能 助教
30	浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会　委員 任期：2014 年 4 月 25 日（金）・6 月 30 日（月）・8 月 1 日（金） 主催：浜松市こども家庭部	社会福祉学部 こども教育福祉学科 　藤田美枝子 教授
31	浜松市障害者施策推進協議会　委員 任期：2014 年 4 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市	リハビリテーション学部 　田島明子 准教授

5. 研究支援

※担当教員の所属・職位は 2014 年度当時

No	内容	担当
1	日本健康科学学会第 30 回学術大会　学術大会長 学術大会長講演「上質な精神・心を培う認知と行動の健康科学」 日程：2014 年 9 月 20 日（土） 場所：アクトシティ浜松コングレスセンター	看護学部 石井敏弘 教授
2	聖隷厚生園学会　審査員 職員による研究発表会の審査員 日程：2014 年 10 月 18 日（土） 場所：聖隷厚生園信生寮まじわりの家	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
3	浜名湖エデンの園園内学会　審査員 職員による研究発表会の審査員 日時：2014 年 2 月 22 日（土） 場所：浜名湖エデンの園	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾惠美子 教授
4	社会福祉法人小羊学園　平成 26 年度法人内研究発表会　外部審査委員 法人内施設・事業所から 6 題の発表の審査と好評 日程：2015 年 2 月 28 日（土） 場所：聖隷クリストファー大学	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
5	平成 26 年度　福祉職員生涯研修課程指導者会議　指導者 キャリアパス対応生涯研修課程（新カリキュラム）導入について　他 日程：2015 年 3 月 3 日（火） 場所：静岡県総合社会福祉会館	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教

6. 資料

1 ニュースレター第６号（年１回発行）

発行：　2014 年 6 月 11,000 部
内容：・センター長挨拶「知的資源を地域へ」
・地域と歩む研究紹介
「高齢者における身体機能移動能力と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究」
「資格取得後の介護福祉士における職場定着に影響を及ぼす促進要因に関する研究」
・地域と歩む活動紹介 地域の小中学校での「健康教育活動」
・2014 年度公開講座のご案内
・2014 年度地域貢献事業研究費 採択研究一覧
配布先：実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、市内図書館・公民館など

2 チラシ制作

1. 公開セミナー・公開講座の案内

種類	講座タイトル
公開セミナー	対人援助の現場でいかすリーダーシップを磨こう！
公開セミナー	発達障がいを持つ人達の思春期、青年期の心理的支援・生活支援・就労支援 ～多職種連携による地域支援ネットワークの展望～
公開講座	認知症を予防しよう（全３回）※ 第１回「認知症を知ろう」 第２回「認知症予防！認知症リハビリテーション」 第３回「認知症予防とアロマセラピー」
公開講座	トップアスリートに学ぶ、「ハードルを超える」

※浜松市からの依頼による「うごく＆スマイル」（貯めよう！健康ポイント）に参加しました。

2. 2014 年度地域貢献事業研究報告会の案内

3 専任教員が大会長等になっている学術大会等への協力・後援

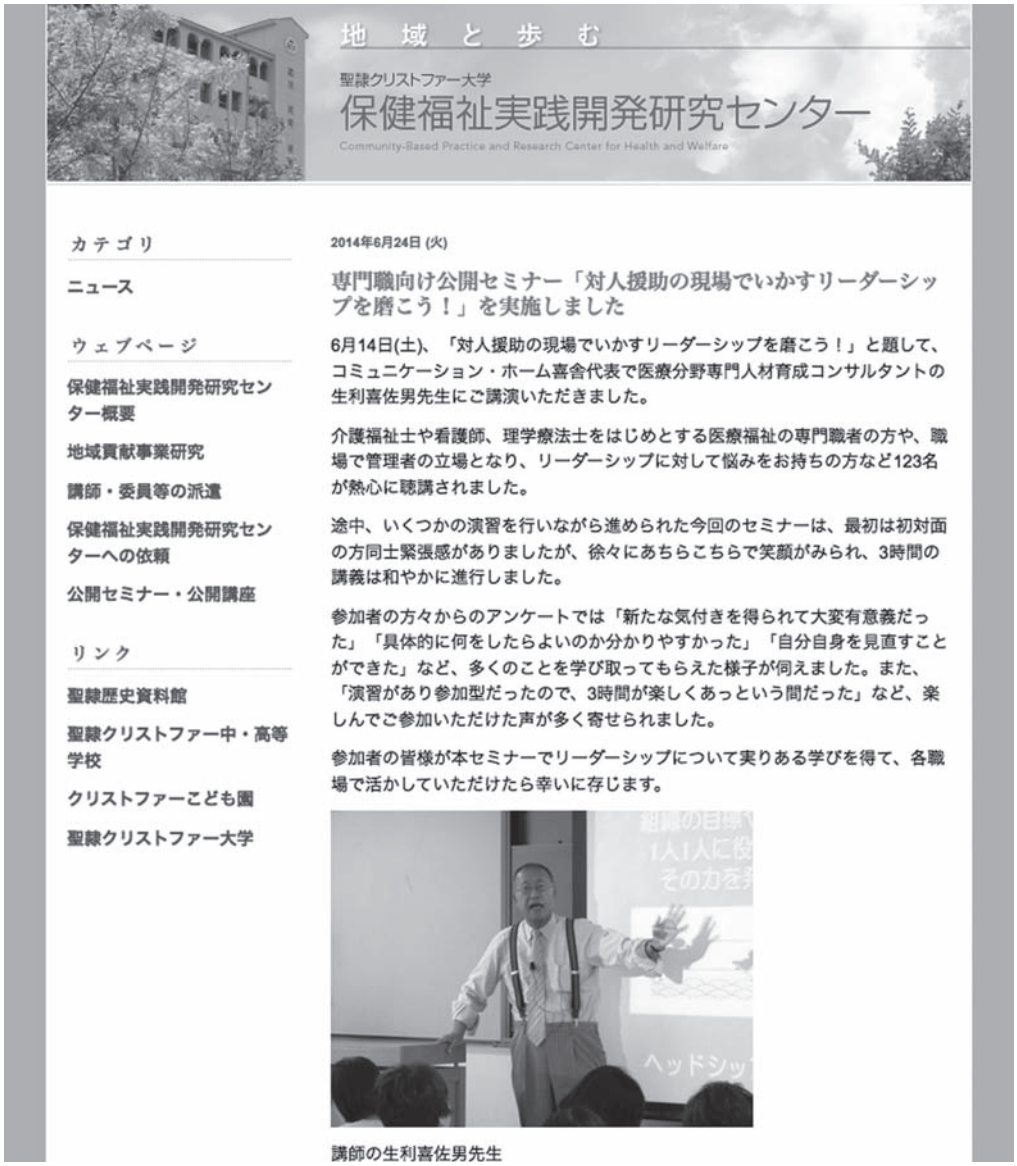
学術大会等	大会長等	日程
日本疼痛心身医学会 第 27 回大会	店村 眞知子 社会福祉学部准教授	2014 年 9 月 13 日
日本健康科学学会 第 30 回学術大会	石井 敏弘 看護学部教授	2014 年 9 月 21 日
全国福祉 レクリエーション・ネットワーク 東海北陸ブロックセミナー in しずおか	和久田 佳代 社会福祉学部准教授	2015 年 2 月 15 日

4 浜松市との意見交換

浜松市の関係部署（子ども家庭部、健康福祉部、精神保健福祉センター）との意見交換を行い、市でも保健医療福祉分野に関する大きな課題を抱えていることと大学に対するニーズがあることを確認しました。

5 ホームページの更新

URL:http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/
大学ホームページ（http://www.seirei.ac.jp/）⇒社会との連携⇒保健福祉実践開発研究センターからリンクしています。



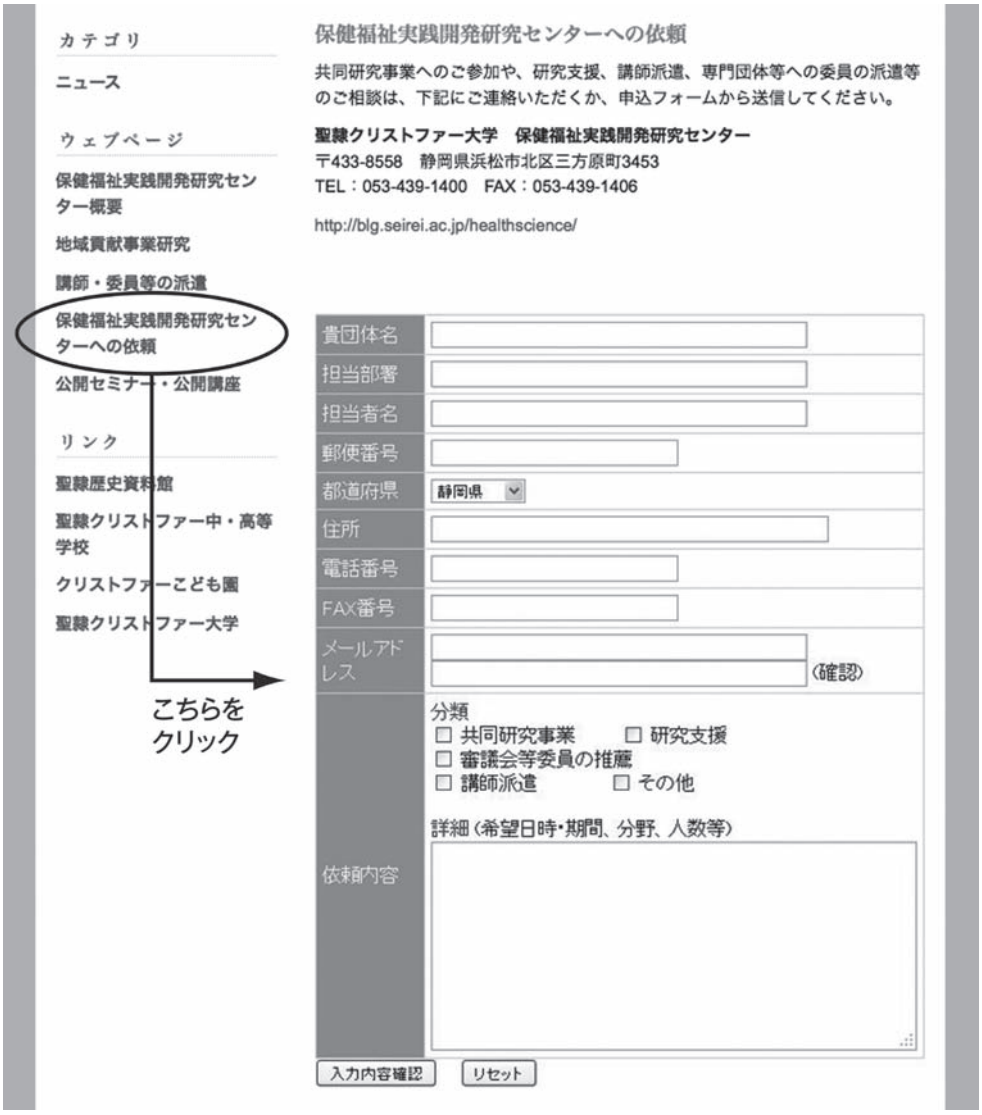
1. 更新ページ

・地域貢献事業研究
　2014 年度地域貢献事業研究費採択課題一覧を掲載
・公開セミナー・公開講座
　2014 年度公開講座案内を掲載、インターネット申込フォーム

2. 当センターへの問い合わせ方法

ホームページに問い合わせフォームを設置していますので、ぜひご活用ください。

URL：http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html



電話でのお問い合わせ先：053-439-1400（大学代表）

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare
地域と歩む
NEWS LETTER
ニュースレター
2014.6
Vol.06

CONTENTS

01 保健福祉実践開発研究センター長挨拶

02 “地域と歩む”地域貢献事業研究の紹介
・『高齢者における身体機能:移動能力と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究』
・『資格取得後の介護福祉士における職場定着を促進する要因に関する研究』

03 “地域と歩む”地域貢献活動の紹介『浜松市内小・中学校での「健康教育活動」』

04 2014年度公開講座のご案内／2014年度地域貢献事業研究費採択一覧

知的資源を地域へ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター長
リハビリテーション学部言語聴覚学科長・教授　小島 千枝子

本センターでは、保健医療福祉分野に関する知的資源を地域に還元し、地域の保健医療福祉の質の向上に寄与することを今年度の基本目標としております。そのために、1）地域との共同事業・研究の推進、2）専門職研修の充実、3）一般市民への知的財産の提供、4）地域の保健医療福祉分野の政策形成への参画を柱とした取り組みを実施いたします。

1）の地域貢献事業研究については、研究成果の報告会を11月の聖灯祭・ホームカミングデーに同日開催いたします。2）、3）に関しては、今年度も本センターが主催して、専門職対象の公開セミナー、一般市民対象の公開講座を開催します。さらに、センターに寄せられた教員の講師派遣依頼に積極的に応えていく体制を充実させます。

保健福祉実践開発研究センターが行うこれらの事業に多くの方にご参加いただき、さまざまなご意見やご要望をお寄せいただき、それをもとにさらに「地域とともに歩むセンター」として貢献してまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

保健福祉実践開発研究センターとは?

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、地域の専門職向けの研修や一般市民の方々への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉のさらなる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。

地域貢献事業研究費2014年度報告会のご案内

2013年度に地域貢献事業研究費の採択を受けた事業研究6件のポスター発表を下記の通り開催します。聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催です。ぜひお立ち寄りください。

日時 2014年11月1日(土)10:00～15:00(予定)

場所 聖隷クリストファー大学

※詳細は保健福祉実践開発研究センターのホームページ等でご案内いたします。

2013年度報告会の様子

地域と歩む　地域貢献事業研究の紹介

Research

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として「地域貢献事業研究費」を配分しています。2013年度に採択された研究の中から2件をご紹介します。

高齢者における身体機能
移動能力と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究

[研究代表者]
リハビリテーション学部理学療法学科長
教授 西田 裕介

共同研究者の所属先	社会福祉法人 浜松十字の園、アドナイ館
対象地域	浜松市北区

本研究は、本学の実習先・就職先である社会福祉法人十字の園と連携した研究です。浜松十字の園には多くの卒業生が就職しています。リハビリテーション専門職のスタッフ（理学療法士）は、そのほとんどが働きながら大学院に進学できるといった恵まれた環境のもと、理学療法における最先端のサービスを提供できる日本でも稀な特別養護老人ホームに勤務しています。今回の研究は、高齢者を対象としたリハビリテーション関連の研究の中でも、大きな話題となっている筋力の低下（特に疲労と神経活動）に着目した研究です。本研究では、身体機能・移動能力が低下している高齢者の疲労しやすい原因を明らかにし、運動の阻害要因である疲労を身体の適応反応の1つとして捉えた新たな運動プログラムの開発を行うことができました。

今後、本研究にて開発した運動プログラムを用いて、地域の高齢者の身体機能・移動能力の維持・向上に貢献していきたいと思います。

資格取得後の介護福祉士における職場定着に影響を及ぼす促進要因に関する研究

[研究代表者]
社会福祉学部介護福祉学科
准教授 野田 由佳里

共同研究者の所属先	一般社団法人静岡県介護福祉士会調査・研究委員会
対象地域	静岡県全域

介護の専門的見地に立ち、現場の状況把握、自らが行っている介護の検証、専門的研究、介護福祉分野の動向や技術の向上、機器の開発等様々な研究の機会を持ちたいと考えた有志メンバーで構成されています。本研究はそのワーキンググループの一つであり、介護職自身の力量不足を問題意識として捉え、現任者のアセスメント能力の不足がケアの低下を招くという共通の危惧を抱いています。また能力開発機会の不足もバーンアウトを招く大きな要因と捉えています。

そこで本研究は、職場定着を促進する要因として、介護職自身が自らのケアを検証できる「生活歴」に特化したアセスメント能力開発ツールの開発を目指し、日々のケアを省察できる機会につなげることを目的としています。先行研究や既存のツールに加え、メンバーの介護経験を加味した項目を列記し、分類し直したものを時系列に整理し、アセスメント能力開発ツール【静岡版】Ver.Ⅰ〈ASMS-1〉の作成を行いました。現在115名を対象とした予備調査の分析中です。

地域と歩む　地域貢献活動の紹介　Activity

地域の小中学校での「健康教育活動」

看護学部　助教 伊藤 純子・助教 高橋 佐和子

地域の児童・生徒の健康の保持増進に貢献すること、また地域の学校・養護教諭との交流を深めることを目的として、看護学部の伊藤純子助教と高橋佐和子助教は、主に浜松市内の小中学校において、児童生徒・教職員・保護者の方々を対象に「思春期における心・体・健康」等をテーマとした健康教育の講師を積極的に行っています。2010年度からスタートした本活動は、その内容のおもしろさが各小中学校の養護教諭の先生方の間で話題となり、毎年非常に多くの講師依頼を受けています。

ひょんなことからコンビを組み、小中学校で講演をさせていただくようになって5年目に入りました。これまでの出張回数は30施設で47回、延べ9千人以上の児童生徒、保護者の皆さんにお話をさせていただいたことになります。「大学教員の講義」と言いますと、難しく堅苦しいイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、私達は大切なメッセージはしっかりと伝えつつ、「楽しくワクワク学ぶ時間」が共有できることを目指しています。といいますのも、どんなに大切なお話をしても、聞き手の心に響かなければ仕方がないからです。

左から高橋助教、伊藤助教

子育てをされている方なら、大切な我が子を思い、苦手な食材が美味しく食べられるようにと料理や盛りつけに心を砕いた経験があるかと思います。それと同じように、私たちも健やかな命と豊かな心を育むための糧、つまり、健康的な生活習慣の定着に必要な情報やスキルが、地域の子ども達へ「美味しく」届くことを願って、日々工夫を凝らすことに力を注いでいます。

2014年4月、大学生向けに行った薬物使用防止に関する講演は、公開ラジオのような演出で展開しました。

講演はドラマ仕立てで、「イケメン研究所の博士と助手」、「怪事件を追う熱血刑事とクールな相棒」などの愉快なストーリーが展開します。子ども達が大好きなカードゲーム形式の教材を開発したり、デジタルネイティブと言われる世代も意識してビジュアルや効果に凝ったりなど、聞き手の背景に寄り添った構成を心がけています。さて、「イケメン」や「怪事件」が、どう健康づくりにつながるのでしょうか。ぜひ、実際に確かめてみてください。皆さまにお目にかかれますことを楽しみにしています。

講師派遣依頼者からの感想

「周囲の視線が気になる悩み多き思春期の子どもたちの目線に立った両先生の語りはとても面白く、どの子も自分の心について楽しく、真剣に学ぶことができました。生徒の感想には「また来年が楽しみです」と、早くも次のお話を期待する声が・・・。
私たち養護教諭もぜひ、またわくわくするお話をお聞かせいただきたいと今年もまた計画中です。」

浜松市立都田中学校 養護教諭 山本春美先生より

講師の派遣依頼は、保健福祉実践開発研究センターホームページの専用フォームをご利用ください。

大学ホームページ http://www.seirei.ac.jp ▶ **保健福祉実践開発研究センター** ▶ **講師・委員等の派遣**

2014年度 公開講座のご案内

主に一般の方向けの講座を「市民公開講座」、主に専門職者向けの講座を「公開セミナー」として開催しています。詳細は大学ホームページに順次掲載します。インターネット、またはFAXでお申し込みください。多くの皆様方のご参加をお待ちしております。

専門職向け公開セミナー

	1 リーダーシップに関する講座	2 IPW（専門職連携）に関する講座
テーマ	対人援助の現場でいかすリーダーシップを磨こう!	発達障がいを持つ人達の思春期、青年期の心理的支援・生活支援・就労支援 ～多職種連携による地域支援ネットワークの展望～
日時	2014年6月14日（土）　13:30～16:30	2014年7月26日（土）　13:30～16:30
講師	コミュニケーション・ホーム喜舎 代表　生利 喜佐男 氏（医療分野専門人材育成コンサルタント）	NPO法人障害者支援情報センター 理事長　進藤 義夫 氏
対象	主に保健・医療・福祉の専門職の方	主に保健・医療・福祉の専門職の方
定員	100名	100名
場所	聖隷クリストファー大学	聖隷クリストファー大学

市民公開講座

	1 認知症に関する講座	2 モチベーションに関する講座
テーマ	認知症を予防しよう（全3回）	トップアスリートに学ぶ、ハードルの越え方
日時	第1回　2014年9月4日(木)「認知症とは?」 第2回　2014年9月6日(土)「認知症予防:手作業をする、頭を使う」 第3回　2014年9月11日(木)「認知症予防の最近の話題:アロマテラピー」 13:30～15:00　※1回のみの参加でも結構です	2014年11月1日（土）　13:00～14:00 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催
講師	聖隷三方原病院 浜松市認知症疾患医療センター長 磯貝 聡 氏 本学リハビリテーション学部 助教 建木 健 本学看護学部 助教 村松 美恵	一般社団法人アスリート・ソサエティ 代表理事 為末 大氏 （陸上競技400mHシドニー・アテネ・北京五輪日本代表）
対象	認知症予防に関心のある一般市民の方	一般市民の方
定員	各回50名程度	500名程度
共催		・リハビリテーション学部10周年記念事業 ・聖隷クリストファー大学同窓会
場所	聖隷クリストファー大学	聖隷クリストファー大学

インターネットからの参加申込み

大学ホームページ▶保健福祉実践開発研究センター▶公開セミナー・市民公開講座
http://www.seirei.ac.jp

画面の案内に従って必要情報を入力後、送信してください。

FAXからの参加申込み

FAX.053-439-1406

氏名（フリガナ）・住所・電話番号・FAX番号・職業（勤務先）・申込講座名をお知らせください。

2014年度地域貢献事業研究費 採択一覧

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2014年度は、2014年2月に公募、4月に審査を行い、6件が採択されました。

区分A　地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究　　区分B　地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

区分	研究課題名	研究代表者（所属）	対象地域
A	実習プログラムとスーパービジョンの有機的な連携のあり方	福田 俊子（社福）	富士市・浜松市
	浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて ～地域の特性を生かした成年後見制度の活用～	横尾 恵美子（介護）	浜松市
	官学連携による高齢者の介護予防事業の実践	吉本 好延（リハPT）	浜松市
B	地域在住者を支えるリハビリサポート体制の構築	金原 一宏（リハPT）	浜松市北区・中区
	「浜松市で障害に対する差別をなくす条例づくり」の検討	田島 明子（リハOT）	浜松市
	発達障害児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み	伊藤 信寿（リハOT）	浜松市

［所属］社福=社会福祉学部社会福祉学科　介護=社会福祉学部介護福祉学科　リハ=リハビリテーション学部　PT=理学療法学科　OT=作業療法学科

【地域と歩む】保健福祉実践開発研究センター ニュースレター 第6号

発行　聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406
Eメール:health-science@seirei.ac.jp

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

公開セミナー　後援：浜松市

受講無料

対人援助の現場でいかす リーダーシップを磨こう！

開催日時 6/14（土）　定員 100名

13:30～16:30〔受付・開場 13:00〕

会場 聖隷クリストファー大学　1号館

対象 主に保健・医療・福祉の専門職の方

講演内容

- リーダーシップがうまく発揮できない…
- 自分の考えをうまくチームのメンバーに伝えることができない…
- どうしたらスタッフの能力を引き出せるのだろうか…

成功の鍵はコミュニケーション力にあります。このセミナーでは、対人援助職のリーダーである皆さんが“向かい合う人”（部下や同僚、患者さんや利用者さん）に何らかの影響力を与え、スタッフなら自ら考えて行動できるように導く、また患者さんなら自ら意欲を持って自立的に病気などに立ち向かえるように導くためのスキルについて学びます。

講師 生利（なまり） 喜佐男（きさお）氏

コミュニケーション・ホーム喜舎代表・医療分野専門人材育成コンサルタント

一橋大学卒業後、大手製薬会社で経営企画部など戦略・企画部門の責任者として従事。人材育成にも関わり、コミュニケーションやリーダーシップを中心とした人材育成プログラムを開発し指導にあたる。その後人材育成プログラムを活用した≪医療機関スタッフ研修プログラム≫を開発し、全国の医療機関・調剤薬局・介護施設などで指導にもあたる。退職後、「コミュニケーション・ホーム喜舎（きっしゃ）」を立ち上げ、引き続き全国の医療機関などで教育・研修を行っている。

申込方法

●インターネットの場合・・・聖隷クリストファー大学ホームページ〔http://www.seirei.ac.jp/〕→ 公開講座から

●FAXの場合・・・・・・・・・聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター〔053-439-1406〕まで（裏面の申込み用紙をご利用ください）

○氏名（ふりがな）○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込締切 6/5（木）

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453

看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

TEL.053-439-1400　FAX.053-439-1406　http://www.seirei.ac.jp/

交通のご案内

●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

公開セミナー　後援：浜松市

発達障がいを持つ人達の 思春期 青年期 の 心理的支援×生活支援×就労支援

多職種連携による地域支援ネットワークの展望

発達障がいは、「見えない障がい」であることから理解が難しく、
教育現場は元より、思春期の心理的な課題や、青年期の就労や自立といった課題で、
困難さに直面してしまうことが注目されてきています。発達障がいのある人に対して、
どのような支援が彼らと彼らの周りの人たちの幸せにつながるのか、
現場での具体的取組の方法や、心理社会的支援、生活・就労支援などを通して、
専門職の連携と地域ネットワークについて話題にします。

開催日時 7/26（土）　受講無料

13:30～16:30（受付・開場13:00）

会場 聖隷クリストファー大学 1号館7階 1701大教室

対象 保健・医療・福祉の専門職の方　**定員** 先着100名

第1部 基調講演

成人期発達障がいへの
就労支援を中心とした実践と課題
～個別の世界の理解を巡る格闘と地域連携～

特定非営利活動法人
障害者支援情報センター 理事長 進藤（しんどう） 義夫（よしお）氏

講師 進藤 義夫氏

平成3年 若者のための精神障害者共同作業所「T&E企画」指導員（所長）。「作業所見学ツアー」「ネットワーク型の就労支援」などのネットワーク構築を行い、平成13年 特定非営利活動法人障害者支援情報センター設立。生活保護受給中の長期入院精神障害者の退院促進から、商工会議所・青年会議所・ライオンズクラブなどの企業団体と連携しての就労支援まで幅広く支援活動を行っている。

第2部 シンポジウム

思春期、青年期の発達障がいを持つ人達への
心理的支援・生活支援・就労支援の実際と課題

シンポジスト

- 浜松市発達相談支援センタールピロ　所長 内山 敏 氏（臨床心理士・小児発達学博士）
- 京丸園株式会社　園主 鈴木 厚志 氏
- 医療法人社団至空会　ワークだんだん　和田 里美 氏（精神保健福祉士）

申込方法

●インターネットの場合・・・聖隷クリストファー大学ホームページ〔http://www.seirei.ac.jp/〕→ 公開講座から
●FAXの場合・・・・・・・・・・聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター〔053-439-1406〕
（裏面の申込み用紙をご利用ください）
○氏名（ふりがな）○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込締切 7/15（火）
※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科
TEL.053-439-1400　FAX.053-439-1406　http://www.seirei.ac.jp

交通のご案内

●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

主催：聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

2014年度公開講座 ・ 浜松市健康ポイント“うごく＆スマイル！”参加プログラム

認知症を予防しよう

専門の先生によるお話を通して、認知症に関する正しい情報を得ていただいた上で、認知症の予防にもなるといわれているリハビリテーションとアロマセラピーを紹介し、楽しく日常生活を送っていただくための講座を開催します。

参加対象：一般の方（どなたでも）

参加無料

後援：浜松市

日 時・テーマ	内 容	講 師
第1回 2014年 9月 4日(木) 13:30 ～ 15:00 認知症を知ろう	齢を重ねると、“忘れた”という経験をすることが多くなります。加齢による物忘れと、認知症による物忘れは違います。この違いを理解するため、認知症について専門の先生のお話をお伺いします。	聖隷三方原病院 浜松市認知症疾患医療センター センター長　磯貝 聡 氏
第2回 2014年 9月 6日(土) 13:30 ～ 15:00 認知症予防！認知症リハビリテーション	認知症予防と認知症進行を遅くするため、病院や施設で取り組まれているリハビリテーションのノウハウをわかりやすく説明します。より長い健康寿命を得るために日常生活を変えてみませんか？	聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部 作業療法学科 助教　建木 健
第3回 2014年 9月 11日(木) 13:30 ～ 15:00 認知症予防と アロマセラピー	最近、ローズマリーやオレンジといったアロマの香りが、脳に対する活性作用を示すと言われ注目されています。今回は、代表的なアロマについてお話しし、少しですが、アロマの香りを体験していただこうと考えています。	聖隷クリストファー大学 看護学部 看護学科 助教　村松 美恵

会場： 聖隷クリストファー大学 3号館1階（浜松市北区三方原町3453）

【申込締切】
8/26（火）
【定 員】
各回先着50名
いずれかの回のみのご参加でも結構です。

申し込み・問い合わせ先

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター
TEL:053-439-1400　FAX:053-439-1406
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453　http://www.seirei.ac.jp

【申込方法】インターネットまたはFAXでお申し込みください。
○〔大学ホームページトップ〕⇒〔保健福祉実践開発研究センター〕⇒〔公開講座〕
○FAXでお申し込みの場合は、裏面をご利用ください。

公開講座

聖隷クリストファー大学
リハビリテーション学部

10周年記念講演

ハードルを超える

トップアスリートが一流であり続けるためには困難な壁があります。
競技に打ち込む独自のスタイルと自分を見つめて
思索する姿が感銘を呼び、「走る哲学者」とも呼ばれる
為末大氏を講師にお招きし、モチベーションの保ち方や
心構えなどについてお話しいただきます。

2014.11/1(土)
13:00~14:00(受付 12:15~12:45)

参加無料

会場　聖隷クリストファー大学　第一体育館
対象　一般の方
定員　先着400名

講師
一般社団法人
アスリート・ソサエティ 代表理事
為末 大(ためすえ だい) 氏

2000年	シドニーオリンピック 400mハードル出場
2001年	世界陸上エドモントン 400mハードル 銅メダル
2004年	アテネオリンピック 400mハードル 準決勝進出
2005年	世界陸上ヘルシンキ 400mハードル 銅メダル
2008年	北京オリンピック 400mハードル 出場
2012年	日本選手権を最後に25年間の現役生活を引退

元陸上競技選手・400mハードル日本記録保持者。陸上スプリント競技で日本人初のメダルを獲得するなど、世界選手権で2度の銅メダルを獲得。オリンピックはシドニー、アテネ、北京の3大会に出場。2010年、アスリートの社会的自立を支援する「一般社団法人アスリート・ソサエティ」を設立、代表理事を務めている。現在は、アスリートのセカンドキャリア支援、執筆、テレビ出演等多方面でスポーツと社会についての活動を広げている。著書に「走る哲学」(扶桑社新書)、「走りながら考える」(ダイヤモンド社)、「負けを生かす技術」(朝日新聞出版)、「諦める力」(プレジデント社)ほか多数。

申込方法
【インターネットの場合】
聖隷クリストファー大学ホームページ〔http://www.seirei.ac.jp〕▶公開講座から
【FAXの場合】裏面の申込み用紙をご利用ください。
※申込締切日以降に参加票を送付いたしますので、当日お持ちください。

受付期間
9/1(月)→10/20(月)
お申込みは、受付期間中にお願いいたします。
なお定員に達し次第、受付を終了いたします。

主催　聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部／聖隷クリストファー大学 同窓会／聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター　後援　浜松市

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL.053-439-1400
FAX.053-439-1406
http://www.seirei.ac.jp

看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科／
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

地域貢献事業研究報告会

2014年11月1日（土）　聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催

1号館4階 1409教室 にて　10：00 ～ 15：00

2013年度に実施された
地域貢献事業研究の
6件の**ポスター報告と**
プレゼンテーション
を行います！

ポスター展示を見ながら
休憩スペースとしても
どなたでもご利用ください！
お茶・お菓子も
テイクフリーです！

ヴァイオリン・ピアノ
ミニコンサート
10：00～12：00 の間に開催！
看護学部卒業生　伊藤ちさ さん
社会福祉学部　店村眞知子 准教授

研究課題	研究代表者(所属)
保健専門職が対応するクレーム特化型研修プログラムの共同開発	伊藤 純子（看護学部）
介護福祉士資格取得後に職場定着に影響を及ぼす促進要因に関する研究	野田 由佳里（社会福祉学部）
高齢者における身体機能と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究	西田 裕介（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部）
地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の定着	金原 一宏（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部）
発達障がいをもつ児童への支援の確立および少～青年期の支援研究	伊藤 信寿（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部）
地域における言語聴覚士の専門性の活かし方を検証～ことばの教室の先生を対象とした機能性構音障害のスキルアップ研修を開講～	池田 泰子（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部）

地域貢献事業研究とは：

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究事業を対象として配分する『地域貢献事業研究費』により実施された事業研究のことです。
当センターは「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同事業・研究」を推進し、共同で課題解決を図ります。

2014 年度
地域貢献事業研究　報告書

発達障害児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み

伊藤信寿*[1)]、真鍋智美[2)]、白瀧いずみ[2)]、長谷美智代[3)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]根洗学園、[3)]合同会社 MiMo チルコロ

1 目的

浜松市の第 3 期浜松市障害福祉計画の中で，平成 26 年度の児童福祉法に規定するサービス全体の見込み量を算出している．そこには，全体的に年々増加傾向にあり，平成 24 年から平成 26 年の予測をみると，障害児相談支援件数 524.1%，児童発達支援 126.5%，放課後等児童デイサービス 104.7%，保育所等訪問支援事業 230% の増加率を見込んでいる．しかし，浜松市における発達障害児への支援は，専門機関が少なく，特に児童期から青年期での支援方法は確立されておらず，その対応は緊急な課題である．実際に浜松市在中の発達障害児の母親は，幼少期においては支援が比較的多くあるが，就学期以降は支援がなく，困っているということを多く訴えている．このように発達障害児あるいは，グレーゾーンの子どもに対する量と質における支援の不足により，孤独な保護者，関わりが薄い親子関係等の課題に対する取り組み，地域社会が子どもを取り巻く支援に関心や理解を深め，地域が協働しながら，支えていくことが必要と考える．

そのため，今回の研究は，まず浜松市の発達障害児の子育てにおける家庭のニーズや課題を検証することを目的とする．さらには，広範囲な年齢層の子どもたちを地域で支える子育て支援システムを構築し，定着させることを今後の検討課題とする．

2 方法

1. 対象

A 発達支援センターを卒園した小学生 8 名．

2. 募集方法

A 発達支援センターを卒園し，在園中に作業療法士による感覚統合療法（以下 SI）に基づいた集団作業療法に参加した子どもの家庭に，センターより余暇支援活動参加の案内と希望申請を送付．8 名から参加希望があり，発達障害をもった小学生 8 名に対し，余暇支援活動を実施した．そのうち同意が得られ 8 名について分析した．

3. 倫理的配慮

対象者の保護者に対し研究内容と，研究協力の同意が得られない場合も余暇支援活動を受けられることを説明し，全員から署名にて同意を得た．

4. 余暇支援活動の内容

期間：夏休み 2014 年 8 月 19 日，20 日，21 日の 3 日間．
　　時間は 10 時から 17 時までであるが，参加時間は各家庭で自由とした．
場所：中区にある倉庫を借り，SI で使用する遊具を設定した．

図 1 お借りした倉庫

図 2 遊具等を使用した遊びに挑戦

図 3 みんなで昼食作り

活動内容：表１　活動には子どものみが参加した．子どもの送迎は保護者にお願いした．

表１　余暇支援活動の内容

	8/19	8/20	8/21
午前	SI を基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SI を基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SI を基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（流しそうめん）	昼食（ハンバーグ）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由

5. SI とは

自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で，混乱している方に対して，遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して，感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である．例えば，光や音に非常に過敏なため，過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや，触覚が非常に過敏なため，物に触れない，人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども，逆に触覚が鈍麻なために，ボタンや紐の感触がわかりにくく，上手くボタンをはめられない，靴ひもを結べないといった不器用な子ども．あるいは，高さやスピードに対して非常に鈍麻なため，高所のような危険な場所に行きたがったり，過剰に動き回る子どもなど，感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために，問題行動を引き起こしている子どもが少なくない．このような子どもに対して，遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより，子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し，苦手な部分を育てていくことを目的としたものが SI である．

6. 効果判定

子どもの特徴の評価：JSI-R

JSI-R：子どもに感覚刺激に受け取り方に偏りがある場合，その傾向が様々な行動に表れてくることがあります．JSI-R は，このような行動の出現頻度を調査することで，子どもたちの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握しようとするチェックリストです．前庭感覚 30 項目，触覚 44 項目，固有覚 11 項目，聴覚 15 項目，視覚 20 項目，嗅覚 5 項目，味覚 6 項目，その他 16 項目の 8 つの下位検査と 147 の質問項目から構成されている．結果は，「典型的な状態」，「若干の偏りの傾向が推測される状態」，「偏りの傾向が推測される状態」の 3 段階評価で解釈できるように作成されている．

活動の効果の評価：保護者へのアンケート調査

7. スタッフ

著者 1 名と研究協力者 3 名，学生ボランティア 5 名

3 結果

1. JSI-R

表 2 に示すように，参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった．

表 2 JSI-R の結果

	Green	Yellow	Red
前庭覚	1 名	4 名	3 名
触覚	1 名	4 名	3 名
固有覚	1 名	3 名	4 名
聴覚	0 名	3 名	5 名
視覚	2 名	3 名	4 名
嗅覚	5 名	3 名	0 名
味覚	2 名	5 名	1 名
その他	1 名	1 名	5 名
総合点	2 名	3 名	3 名

Green：典型的な状態，Yellow：若干の偏り推測される，Red：偏りが推測される

2. アンケート結果

①参加してお子さんの様子はどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
5 名	3 名	0 名	0 名	0 名

②参加してご家族にとってはどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
5 名	3 名	0 名	0 名	0 名

③参加する前に，期待していたことは

・遊具で遊べること
・本人が楽しんで参加できれば
・初めての場所，人にどのくらい適応できるか心配で，今後の参考に様子をみたい
・楽しい時間が過ごせる場であってほしい
・親が安心して子どもを預けられる場であってほしい

上記の期待していたことは達成できましたか

達成できた	ほぼ達成できた	まあまあ達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
7 名	1 名	0 名	0 名	0 名

④お子さんの余暇支援活動など，どのようなサービスがあればいいと思いますか
・今回のように思い切り体を動かして遊べる場
・送迎から支援してくれるサービス
・きょうだいで同じ場所で見てくれるサービス
・プール活動を支援してくれるサービス
・気軽に参加できるといい
・子どもの適性を見出し，継続しての活動につながっていくような形があればいい
・公共の施設などは行きたくても行けないので，気にせず遊ばせてあげられる所

⑤また，このような活動があれば参加したいですか
参加したい 8 名

4 考察・結論

今回参加した保護者からは，昨年実施した研究と同様に「公共の施設などに行きたいが，周囲が気になり行けない」，「身体を動かして遊べる場がほしい」というような希望が聞かれた．アンケート結果から今回の活動は昨年に引き続き，保護者の希望に沿った支援であったと考えられる．

さらに，今回の参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった．特に，前庭覚，固有覚という身体を動かすことにより得られる感覚刺激に対する鈍麻が多く認められた．この結果から，前庭覚，固有覚が鈍麻な子どもたちは，その感覚ニーズを満たすために，多動等の落ち着きがなく，問題行動として，捉えられることが少なくない．そのため，普段の日常生活から，子どもたちの感覚ニーズを満たす遊びや場の提供が必要である．今回の試みは，遊具や粗大運動を取り入れた SI の実施により，子どものたちの感覚ニーズを満たす活動になったと考えられる．しかし，本来であれば，遊具を使用した遊びは公園等でできるが，保護者からの意見にもあったように，公共の場で遊ばせるのに躊躇している．そのため，今回のような支援により，気軽に周囲を気にせず子どもを遊ばせる場の提供が必要である．

今後も，発達障害の子どもたちが，気軽に遊べる，あるいは集うことができる場の提供を検討していくことが重要であると考える．

浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人活用のニーズについて

横尾恵美子[1)]、高木誠一[2)]、堂元京子[3)]、杉浦芳江[4)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]社会福祉法人光の園浜松協働学舎
[3)]独立型社会福祉士事務所ライフサポートゆい、[4)]地域包括支援センター芳川

1 研究の背景

2000 年に認知症、知的障害、精神障害など物事を判断する能力が十分ではない方の権利を守るために、本人を法律的に支援する成年後見制度が制定された。2000 年には成年後見等の受任案件は 3,754 件であったが、2009 年には 24,605 人、2013 年は 34,220 人と増加の一途をたどっている。成年後見人等と本人の関係をみると、親や配偶者、兄弟、子どもといった親族の割合が年々減少し、弁護士や司法書士、社会福祉士といった専門職後見人の割合が増加している。2013 年度は親族後見人が 48.5%、専門職後見人が 51.5% と専門職後見人の割合の方が上回っている。しかし、専門職後見人はその需要にこたえきれていない現状がある。

2012 年 4 月には老人福祉法第 32 条「後見等に係る体制の整備等」が制定され、成年後見等の業務を適正に行える人の育成とその活用を図るための研修を市町村に求めている。この事業は市町村において市民後見人を確保できる体制を整備・強化し、地域における市民後見人の活動を推進するというものである。横尾は富士市で 2012 年度から市民後見人推進検討会の会長として市民後見人を富士市に導入するための審議を重ねてきた。その結果富士市は静岡県で最初に市民後見人を養成することとなり、それ以降毎年市民後見人養成研修を行い、市民後見人養成に積極的に取り組んでいる。

国の施策に添って、市民後見人を浜松市において導入するには、まずその準備が必要であると思われる。これまで浜松市において、成年後見制度の利用の状況等の研究はあまり行われていない。国が示すように市民後見人を育成することになるにしても、まずは現状を把握し、その地域に即した対策が行われる必要がある。

2 研究目的

本研究では地域包括支援センターを研究対象施設とし、そこに勤務する介護支援専門員を対象に成年後見制度の理解度と実際のケースにおける成年後見制度の利用実態と成年後見制度や市民後見人の活用に対する考え方を把握することにある。

3 研究方法

1. 対象

浜松市の地域包括支援センター（26 事業所）の介護支援専門員

2. 調査方法

浜松市の地域包括支援センターの全数調査を行う。施設管理者に調査協力依頼書を郵送し、所属する介護支援専門員へは調査協力依頼書と調査票、個別に封のできる封筒と切手を貼った返信用の封筒を郵送する。

3. 調査期間

2015 年 1 月 10 日から 1 月 31 日

4 結果

回答事業者数 17 施設（回収率 68%）有効回答数 60 名

1. 属性

1）性別：男性 7 名（11.7%）、女性 53 名（88.3%）
2）年齢：平均値 46.1、SD 9.75（n=58）
3）福祉経験年数：平均値 10.0、SD 6.48（n=55）
4）現在の職場での経験年数：平均値 3.6、SD 2.83（n=60）
5）取得資格

社会福祉士や介護福祉士の取得者が看護師や保健師よりも割合が高い。主任介護支援専門員は 20 人 3 分の 1 を占める。（表 1 に示す）

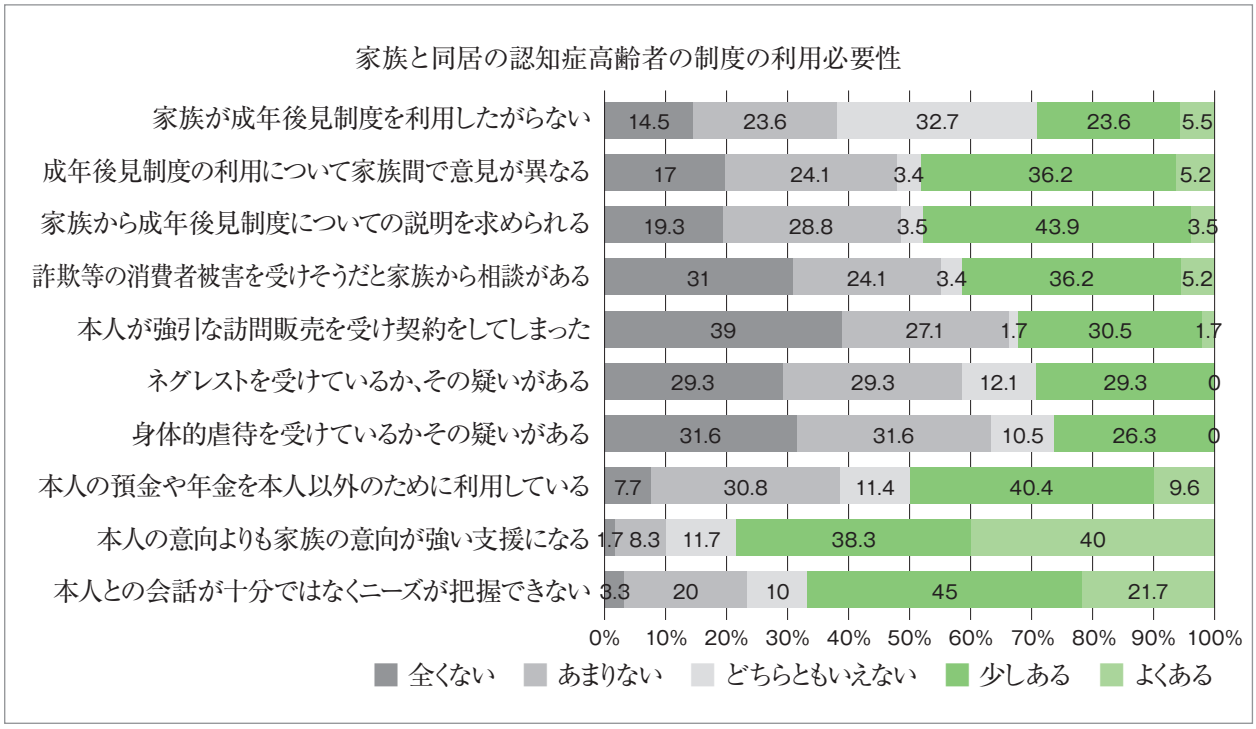
表 1. 所有資格（複数回答）

資格	看護師	保健師	介護福祉士	社会福祉士	精神保健福祉士	主任介護支援専門員
	18	6	22	25	3	20

2. 家族と同居の認知症高齢者の成年後見制度の必要性について

表 2 に示すように、「よくある」「少しある」をあるとして分析した。成年後見制度の利用に関しては制度利用に関して、約 6 割の家族が利用したがらなく、約 5 割の家族が家族間で意見が異なる。しかし、制度に関する関心はあるようで、家族が制度の説明を求めるのも約 5 割に及んでいる。虐待に関しては身体的虐待とネグレストともに約 4 割に及ぶ。「家族が本人預金や年金を本人以外のために利用する」のは 5 割を超えている。「本人より家族の意向が強い支援になる」は 8 割を超えている。（表 2）

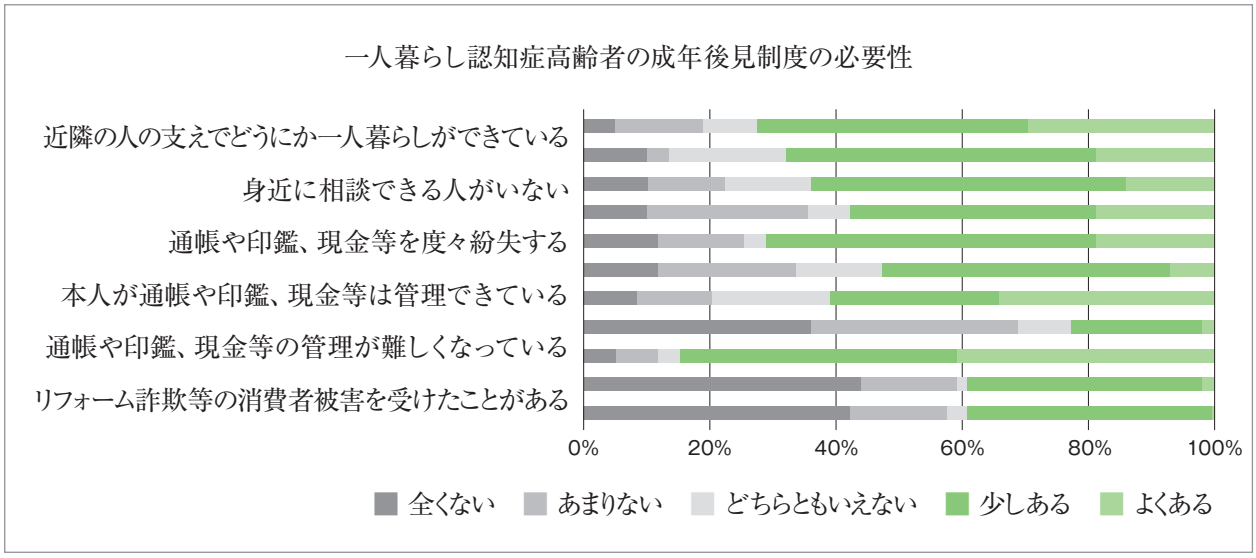
表 2. 家族と同居の認知症高齢者の成年後見制度の必要性



3. 一人暮らしの認知症高齢者の成年後見制度の必要性について

近隣の支えでどうにか一人暮らしを継続できている人が 7 割近くいるが、身近に相談できる人がいない人も 7 割近くいる。「通帳、印鑑、現金の管理が難しくなっている」ことが「よくある」人が 4 割に及び、「少しある」人を含めると 8 割以上にも及ぶ。「通帳、印鑑、現金を度々紛失する」ひとも「少しある」を含めると 7 割を超えている。「リフォーム詐欺等の消費者被害にあったことがある」も「少しある」が 4 割を超えている。（表 3）

表 3.　一人暮らしの認知症高齢者の成年後見制度の必要性について



4. 利用者の実態と成年後見制度等の説明

家族と同居や一人暮らしの認知症高齢者に対する支援の中で、介護支援専門員がどのような時に制度の説明に至るかの相関を調べた。①～⑦の事柄について、相関が見られた。日常生活自立支援事業と成年後見制度の説明は強い相関が有り、r=.727 である。「成年制度の利用について家族間で意見が異なる」は r=.666、r=.606 と強い相関が有り、「身体的虐待を受けているかその疑いがある」も r=.611、r=.539「年金等を本人以外のために使っている」も r=.588、r=.568 と強めの相関が見られた。（表 4）

表 4.　日常生活自立支援事業と成年後見見制度の説明のケース

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
日常生活自立支援事業説明	.727**	.588**	.611**	.499**	.389**	.350**	.666**
成年後見制度説明		.568**	.539**	.344**	.516**	.431**	.606**

①成年後見制度について説明をする ②年金等を本人以外のために使っている
③身体的虐待を受けているかその疑いがある ④ネグレストを受けているか、その疑いがある
⑤訪問販売等で消費者被害にあった ⑥1 人の時に消費者被害を受けそうであると家族から相談がある
⑦成年後見制度の利用について家族間での意見が異なる。
（* p＜.05　** p＜.01）

5. 成年後見制度に対する意識

「成年後見制度の利用支援まで手が回らない」「成年後見制度の利用より地域の支えあいの方が重要である」「成年後見制度を利用しなくとも家族の支援で足りる」という支援にあまり積極的でない人の考え方の傾向を分析した。それらの内容を①～⑩で示し、表の下にその質問項目を表示している。上記の3つの項目にはともに相関があった。3つの項目に共通して相関があるのは⑥の「後見人をつけるほどの財産があるケースが少ない」⑨の「財産管理が難しくなっていると感じても、プライバシーなので介入しない」であった。手が回らないという項目に関しては⑩の r=.470**、⑦の r=.409**、⑤の r=.404** となり、地域の支え合いの項目に関しては④の r=.400**、⑨の r=.385**、家族支援で足りるの項目に関しては④の r=.389** が r>.38 以上の相関がみられた。(表5)

表 5.　制度を積極的には進めない主要な意識の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
①		.269*	.372**	n.s.	.404**	.590**	.409**	.338*	.321**	.470**
②			.365**	.400**	n.s.	.264*	n.s.	n.s.	.385**	n.s.
③				.389**	n.s.	.407**	n.s.	n.s.	.312*	n.s.

①成年後見制度の利用支援まで手が回らない②成年後見制度の利用より地域の支えあいの方が重要である
③成年後見制度を利用しなくとも家族の支援で足りる④成年後見制度を利用するより家族に任せた方が良い
⑤行政が成年後見制度等の普及・啓発活動をもっとすべきである
⑥後見人をつけるほどの財産があるケースが少ない⑦成年後見制度の内容がわかり難い
⑧成年後見制度を家族や本人に説明しにくい
⑨財産管理が難しくなっていると感じても、プライバシーなので介入しない
⑩市民後見人についての普及・啓発活動をもっとやってほしい
（* p＜.05　** p＜.01）

5 考察

同居や一人暮らしに係らず、成年後見制度等の利用が必要であるケースが多く存在することが、判明した。同居の場合には、特に身体的虐待やネグレストが4割に及び年金の本人以外の使用の割合も高い。この件について詳細は本研究では追及できていないが経済的虐待も含まれると考えられる。これらのことから、成年後見制度等の利用に加えて、虐待に対する早期発見や支援の視点が介護支援専門員に必要とされることが示唆された。地域の人に支えられながら一人暮らしができている人も多い一方で、身近に相談のできる人がいない割合も高くなっている。通帳や印鑑を紛失したり、管理が難しくなるなどのことから日常生活自立支援事業のサービス利用を支援する事も必要である。

成年後見制度等の利用支援を積極的に行う職員もいる一方、制度利用に消極的な者がいることが判明した。その要因のひとつは忙し過ぎるという理由であるが、制度の理解が十分でないことや制度を利用する際の手続き等が難しいと感じていることと相関があり、忙しさと、制度理解不足も関連していることが判明した。また地域や家族が支援をすべきとの意識も根強い。また制度の普及・啓発活動の推進の必要性を感じているものも多い。これらのことから、介護支援専門員として、制度利用の必要性やその制度の活用の仕方等の研修を行っていく必要があると思われる。市民後見の導入も急務であるが、同時に成年後見制度の利用につなげていく要である地域包括支援センターの職員の制度に関する理解の促進のための研修と支援につなげるための連携体制の整備もこれからの課題である。

官学連携による高齢者の介護予防事業の実践

吉本好延*[1)]、根地嶋誠[1)]、有薗信一[1)]、金原一宏[1)]、矢倉千昭[1)]、西田裕介[1)]、鈴木郁乃[2)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]浜松市老人福祉センター萩原荘

1 はじめに

我が国においては，急速な高齢化に伴う高齢者の介護問題が深刻な社会問題になっている。平成 22 年の国民生活基礎調査の結果によると，介護が必要になった主な原因は，第 1 位が脳血管疾患 23.1%，第 2 位が認知症 20.5%，第 3 位が高齢による衰弱 13.1%，第 4 位が転倒・骨折 9.3%，第 5 位が関節疾患 7.4%であると報告されており，認知症や高齢による衰弱，転倒・骨折などの老年症候群は，生活習慣病とともに健康寿命の延伸に大きく影響する。浜松市の老年人口の割合は年々増加傾向にあるが，高齢化の進展に伴って要介護者等の認定者数も経年的に増加していることから，高齢者の介護問題が今後さらに深刻な問題になることが予測される。

我が国における介護予防事業は，転倒予防や認知症予防，口腔機能の改善，栄養状態の改善などを目的として様々な取り組みが全国各地で行われているが，介護予防対策の効果については未だ明確なエビデンスがない。介護予防対策の効果が十分明らかにされていない背景には，エビデンスの確立に必要な学際的で，かつ専門的な知識・技術を有する専門職者が現場に少ないこと，研究方法の統制された介入試験を行う際にスタッフや利用者から研究協力が得られにくいこと，長期的に介護予防事業を行うために必要な費用や人材が不足していることなどが考えられる。本研究では，浜松市が実施している特定高齢者の介護予防事業の一つである「元気はつらつ教室」から介護予防事業への協力依頼を受けており，大学と地域の実践現場が連携して介護予防事業を行っていく予定である。本研究では，スタッフや利用者から研究協力への全面的な理解が得られており，介護予防はもちろんのこと，研究に関する専門知識を有する大学教員が参画するため，介護予防対策に関するエビデンスが確立しやすい環境である。

2 目的

本研究は単年度のみの関わりに留まらず，10 年間に渡り介護予防事業を実践していく予定である（図 1）。本研究の最終的な目的は，要介護に繋がりやすい 1）認知症の予防，2）転倒・骨折の予防，3）日常生活活動能力の低下，および身体活動量の低下の予防に焦点をあてて，それらの危険因子の解明と対策の有効性の検証を行うことである。具体的には，老年症候群に繋がりやすいハイリスク高齢者のスクリーニング法の確立および改善プログラムを作成し，包括的な視点で高齢者の健康と自立を支援することはもちろんのこと，医療費および介護費用の削減にも繋がる効果的な対策を，科学的根拠に基づいて確立する。

本年度の目的は，まず長期計画の研究基盤を確立することであり，スタッフや利用者との信頼関係を構築することであった。

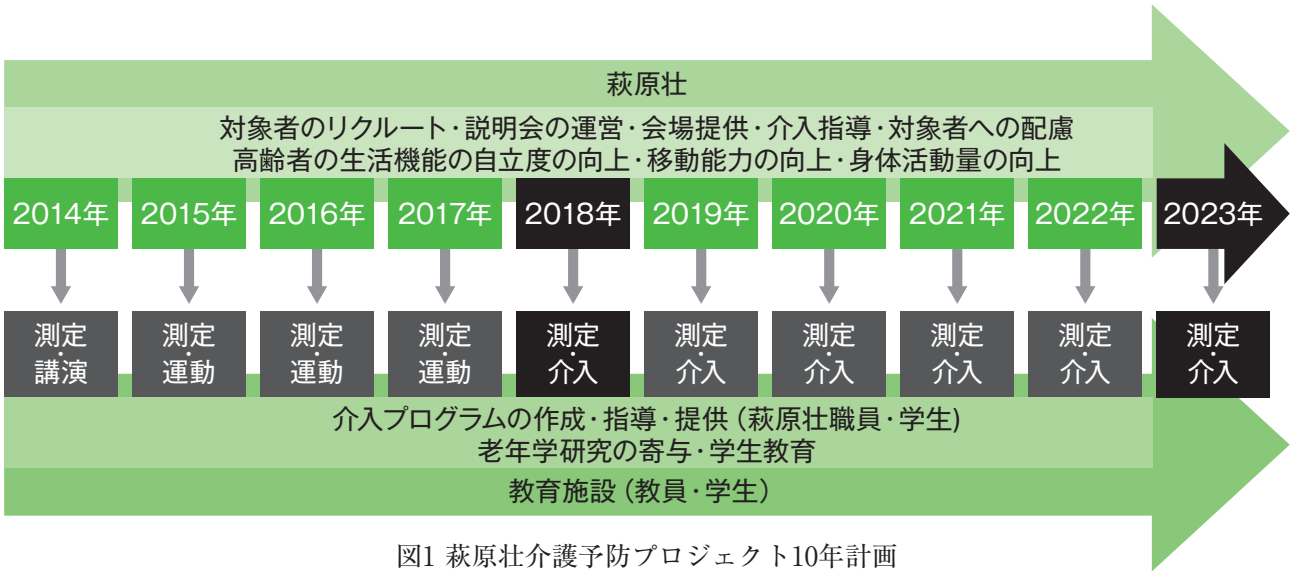


図1 萩原壮介護予防プロジェクト10年計画

3 対象

対象は，浜松市の老人福祉センター萩原壮において介護予防事業（元気はつらつ教室）を行っている高齢者 106（男性 10 名、女性 96 名）名であった。元気はつらつ教室は，浜松市に在住する 60 歳以上の高齢者で介護認定を受けていないが，基本チェックリスト資料の項目に該当する二次予防対象者の中で，教室への参加意思のあるものを対象としている。つまり，本研究の対象は，本研究のために募集された利用者ではなく，地域包括支援センターの募集により，萩原壮での介護予防事業（元気はつらつ教室:転倒予防体操，ゲーム，手工芸など）を週に一度，任意で受けていた高齢者である。

4 本年度実施した介護予防事業の内容

1. 教育講演

毎週 1 回（計 15 回），90 分 / 回，専門的知識を有する教員（中枢グループ，運動器グループ，内部グループ）が，それぞれの専門分野に関する教育講演を行い，どのようなことを利用者は不安に感じているのか，またどのような介護予防事業を行いたいと考えているのかを利用者からの意見聴取を記述的に行った。

2. 健康調査

老年症候群の有病率の把握と老年症候群に関連する心身機能の把握を目的として健康調査を行った。調査項目は，対象者の氏名，性別，年齢，身長，体重，血圧，脈拍，Life space assessment（LSA），日本語版 Montreal Cognitive Assessment（MoCA-J），握力，足指把持力，膝関節伸展筋力（Hand Held Dynamometer: HHD），Functional Reach Test（FRT），Timed Up And Go Test（TUGT），Four square step test（FSST），2 分間歩行距離とした。

測定時期は 9 月とし，測定回数は全 2 回，測定時間は 13 時から 14 時 30 分までとした。萩原壮は曜日ごとに異なる利用者が参加するため，曜日ごとに検査者を確保する必要性があった。例えば，火曜日は教員 1 名と学生 15 名，水曜日は教員 2 名と，学生 20 名というように，利用者の数に合わせて測定者数を確保した。測定は信頼性の問題を考慮して，できるだけ同じ検査者が測定するように心がけた。測定者は全40名程度であり，全ての測定者には事前に測定のオリエンテーションを行った。測定した結果は，分析した後に専用の用紙に記載し，全ての利用者に個別にフィードバックを行った。

5 結果

1. 介護予防事業へのアンケート結果

利用者の意見は，転倒や認知症が今後の不安要素であり，転倒予防や認知症予防を目的とした関わりを行ってほしいとの意見が多く聞かれた。排尿障害の改善や体力改善を目的とした講演を行なってほしいなど自身の健康状態に関する意見が聞かれた。一方で，専門用語で話されると理解しにくい，フィードバックの映像が見えにくい，スタッフの関わりなども含めて改善すべき点もあった。

スタッフの意見は，講演や測定への肯定的な意見が聞かれ，元気はつらつ教室だけで終わるのではなく，萩原壮全体にも行っていただきたい，健康調査は利用者の意識づけになった，今後も継続して続けていただきたい，学生さんが参加してくれてよかったとの発言があった。教育講演は，測定上の環境設定の問題が多く聞かれた。健康調査は測定場所の確保が難しく，狭い教室でも測定できる評価が望ましい，マンパワーの確保が難しい，利用者が自宅でもできる安全な検査はないか，などの意見が聞かれた。

教員の意見は，健康教室への関わりの方法についての意見が聞かれた。講演と健康調査だけでなく，事前の打ち合わせを合わせて計 20 回近く萩原壮に参加した教員もおり，準備，大学と萩原壮間の移動（自動車で片道 30 分程度），萩原壮での活動の時間を総合すると約 4 時間程度を要した。学生によって検査のオリエンテーションの仕方が異なっており，測定結果の信頼性に疑問があった，質問紙の文字が見えにくく，利用者が困るなどの意見があった。

学生の意見は，測定上の意見が多く聞かれた。最初に問診に時間をかけ過ぎて後の項目が測定できなかった，利用者が全員測定できているのか状況把握ができなかった，問診は静かな部屋で行う方が良い，どこで測定すれば良いのかブースの場所がわからない，会場に到着後の学生の待機場所がわからない，問診をしているとスタッフに回答を誘導された，ブースの空き状況がわからないなどの意見が聞かれた。

2. 健康調査の結果

当日測定が可能であった参加者は 96 名(男性 6 名, 女性 90 名)，平均年齢は 84.61 ± 4.96 歳(最小値 71 歳，最大値 95 歳）であった。対象者の身体機能・精神機能に関する結果を下記に示す（表 1）

表 1. 対象者の特性

項目	全体		男性		女性		85 歳以上		85 歳未満	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
BMI	22.54	3.23	22.59	2.27	22.54	3.29	22.55	4.54	22.54	3.14
Life Space assessment（点）	71.04	25.25	75	40.31	70.78	24.25	65.84	27.38	76.93	23.19
MoCA-J（点）	20.65	4.42	18.83	3.25	20.77	4.47	20.59	5.04	20.71	4.71
握力（左右平均）（kg）	16.8	3.78	25.35	2.77	16.31	3.21	15.88	3.7	17.85	3.64
足指把持力(左右平均)（kg）	5.71	3.13	6.67	5.66	5.65	2.93	4.66	2.69	6.91	3.23
HHD（利き足）（kgf/kg）	0.27	0.11	0.22	0.06	0.27	0.12	0.24	0.11	0.29	0.12
FRT（cm）	16.65	6.31	17.63	10.08	16.59	6.06	16	6.84	17.39	6.02
TUG（秒）	9.86	2.63	8.48	1.67	9.94	2.66	10.85	2.91	8.67	1.62
FSST（秒）	10.79	3.46	8.93	0.95	10.89	3.51	11.64	3.9	9.49	2.28
2分間歩行テスト（m）	113.72	26.94	134.83	13.69	112.28	27.06	107.51	29.94	120.48	25.72

6 考察

2014 年度は，利用者や萩原壮スタッフとの信頼関係を構築することを最優先の目的として，教育講演と健康調査を実施し，アンケート結果からも概ね良好な信頼関係を構築できたと考えられた。健康教室の継続に関しては，大学業務との調整が必要であり，教員参加の方法を検討する必要性があった。例えば，遠隔会議システムを用いた介護予防教室なども検討する必要性がある。今後，介護予防現場においては，少ないスタッフで多くの利用者に対応することが求められるが，運動や栄養指導などの専門的知識を有する職員を確保することは難しく，地域包括支援センターが病院や施設に業務委託する場合が多い。健康教室の開催場所を病院や施設以外で行う場合は，地域の公民館などで行う場合が多いが，専門職者の移動時間の確保だけでも相当な負担になる。遠隔会議システムを利用すれば，専門職者が遠隔会議に参加し，地域の介護スタッフが実働として利用者のアシスタントを行うことも可能になり，今後さらなる検討が必要である。

対象者の特性としては，平均年齢 84.61 歳と極めて高齢の集団であり，全体の 9 割以上が女性であったことから，転倒・骨折や排尿障害，変形性関節症など女性に生じやすい高齢期の問題に着目したアプローチが必要である。対象者の心身状態としては，高齢集団であるものの，比較的心身状態は良好であり，健康教室に参加している健康意識の高い集団であると考えられた。ただし，健康調査における測定の方法としては，測定時間の問題から当初予定にない異なる検査者が測定を行った場合もあり，測定結果の信頼性には疑問が残る結果であった。利用者数からも健康調査には相当なマンパワーが必要になるが，測定方法に関しては，検査者への事前の十分なオリエンテーションや練習機会を確保するなど，測定への事前の準備が必要である。

7 まとめ

本研究事業は 10 年間の長期計画として開始されたものであり，本年度は，長期計画の研究基盤を確立するためにスタッフや利用者との信頼関係を構築することを目的とした。本研究では，本年度の介護予防事業の実践報告に留まったが，本年度測定した調査項目をベースラインとして縦断的に観察研究を行うことで，要介護および健康寿命の低下につながる老年症候群の原因を明らかにできると考えられた。

地域在住高齢者を支える痛みのリハビリサポート体制の構築

金原一宏*[1,2]、大城昌平[1,2]、根地嶋誠[1,2]、寺田和弘[3]
[1]聖隷クリストファー大学、[2]聖隷クリストファー大学大学院、[3]寺田痛みのクリニック

1 事業の概要

国民の痛み有訴率は、平成22年度に発表された厚生労働省国民生活基礎調査において、平成19年、22年で第1位、2位を腰痛、肩こりが占め、さらに罹患者数は増加傾向にある。このような慢性疼痛患者について平成16年に服部ら（2004）は、日本の慢性疼痛の保有率は、国民の13.4%で約1700万人と報告している。松平ら（2009）の研究においても同様である。我が国の慢性疼痛治療が、奏効していない状況である。この慢性疼痛は、有病割合の高い難治性疾患で、個人の「QOL」低下に加え、社会経済的な影響は、痛みが治らないことで医療不信やドクターショッピング、離職や介護の問題などがある。

慢性疼痛は、本来の痛みの意味である体への危険信号ではなく、痛みを受けすぎることで中枢神経に可塑的な変化を呈した病態である。身体障害がなくとも、脳内の変化により、痛みを感じている。国際疼痛学会における痛みの定義は、「痛みは、不快な感覚性・情動性の体験であり、それには組織損傷を伴うものと、そのような損傷があるように表現されるものがある。」としている。つまり、炎症の痛みだけでなく、情動（心）による痛みも含め、痛みと定義している。臨床において、このような慢性疼痛を有する患者は、痛みについて学ぶ機会が少ない環境にある。理由は、近年の研究により痛みの慢性化の原因が明らかになったためである。自身の痛みが、なぜ起きているのか、急性疼痛を含め、慢性疼痛の痛みについて理解を深める必要がある。このような背景から痛みを知る機会を設けることは、痛みの悪循環離脱にもつながり、日常生活をより快適に生活することになると考えられる。

地域高齢者は痛みを持つ方が多い。このような方々が快適に暮らすには、疼痛の知識を学び、自宅や介護保険サービスの利用時に周囲の方と共に、運動に取り組むことで、慢性疼痛を減少させる必要がある。現在の状況を知る限り、早急な対応が必要である。我々は、地域住民が健やかに生活するために痛みを含めた健康講座を開催した。この講座は、地域住民や地域在住高齢者の健康寿命の延長を支えていく上で重要である。健康には、身体的健康と心理的健康があり、各分野に精通した医療従事者である本学教員が講師を務めることで地域在住高齢者との交流を図ることができ、本大学及び大学院が地域に根付いていくことに繋がる。講座を通じて、最新の脳や身体機能（身体的・心理的健康）、そして痛みの話題、さらに研究への参加が促され、地域住民は脳と身体機能を自ら知ることで、痛みや健康への意識が増すと考えられる。

この講座の役割は、日頃の研究を地域住民へ還元するとともに、地域住民が気軽に参加できる講座を地域内で開催することで、日常生活における生活の質の向上と健康寿命の延長を支えると考えている。

2 目的

地域在住高齢者の健康生活を支えるシステムを構築するため、本講座の状況を踏まえ現状のリハビリサポート体制を把握する。

3 実施方法

①研究分担者と相談し、今年度は、肩の痛みに関する講座と身体機能等の改善に関する研修会を企画し、痛み及び心身機能検査を行った。
②リハビリサポートの広告を作成した。（図 1）
③浜松市北区及び中区にリハビリサポートの広告を出し、参加者を募った。（新聞折り込み；1 回実施）
④聖隷クリストファー大学の教室を使用してリハビリサポートを実施した。（図 2）（実習・講演等を中心に行った）
⑤より良いサポートのために、簡易な身体機能、痛み評価、QOL などの検査を紹介し測定も合わせて実施した。
⑥アンケートにより、受講生のトレーニングに関する意欲や講座内容の反応、さらに地域への貢献度を調査した。
⑦アンケートを利用して地域の方々が必要としている情報内容を把握することに務め、この活動をより充実したものにするため情報収集をした。

4 倫理的配慮

研究代表者および個人情報取扱者は、対象者ごとに整理番号を付与して、匿名化データを作成し、厳重に保管・管理する。この活動から得られた結果の公表については、個人の名前など一切わからないようにし、プライバシーが完全に守られるように配慮した。

5 成果（地域との連携の成果）

今回の成果であるアンケート結果を以下に示す。
参加者数：2 月 21 日：64 名
アンケート回収率：97%
以下アンケート内容（図 3）

問 1	あなたの性別と年齢を教えてください
	男 18 名平均年齢 64 歳（31 ～ 85）　女 46 名平均年齢 66 歳（29 ～ 85）
問 2	「痛みの基礎と最新治療」を受講して理解が深まりましたか？
	かなり理解できた 16 名・理解できた 39 名・どちらともいえない 2 名・あまり理解できなかった 1 名
問 3	「慢性的な痛みのリハビリ」を受講して理解が深まりましたか？
	かなり理解できた 20 名・理解できた 35 名・どちらともいえない 1 名
問 4.	「肩の痛みのトレーニング」を受講して理解が深まりましたか？
	かなり理解できた 20 名・理解できた 30 名・どちらともいえない 1 名
	（問 3・4・5 では、全く理解できなかったは 0 名であった。）
問 5.	今回の講義を受け今後の生活で自主訓練を実施しようと思いますか？
	かなり理解できた 6 名・理解できた 45 名・どちらともいえない 2 名
問 6.	このような健康講座は 1 年にどれくらい実施してほしいですか？
	毎月 5 名・2 か月に 1 回 19 名・3 か月に 1 回 23 名・6 か月に 1 回 3 名・1 年に 1 回 2 名

問７　今回の講義を受け、ご意見をお聞かせください。（自由記入欄）

・学生さん、先生との交流が新鮮でした。神経痛の付き合い方をプラス思考で進められそうです。独り悩むのではなくという意味で。

・理学療法士の先生の為になるお話し、スライドずい分と勉強になりました。資料も頂けると嬉しいかと思いました。私は慢性肩こりですが、肩のスライド写真図も資料も欲しかったです。帰りに資料いただきました。今回は有難うございました。

・痛みは、服を着たり、洗濯物を干したりする時に感じますが、今は治療をしていません。運動をしていますが、心配です。

・リハビリ体操の実施が大変、参考になった。ありがとうございました。

・受講して良かったです。少し痛みがやわらぎました。

・散歩して、周囲を見、季節を感じ、楽しみました。家にあっては笑顔ですごしたいと思いました。教えて頂いた事、一つでも多く実行できたらいいなと、生活の中に取り入れてみたいと思っています。

・痛みはその人その人で判断が違うと思いますが、どの位まで、ガマンをしてから病院に行くのがよいかがわかりませんでした。今、私は首を11月に手術しました。腰も手術を行う予定です。今回、お話しを聞いて、こんなに悪くなる前にやれることが少しはあったのではと思います。

・今、認知症対応グループホームで、介護福祉士として働いています。利用者様の体調改善に役立てたいと思います。ありがとうございました。笑顔の大切さ、職員もですね。職場に伝えます。

・今日の講義をうけて嬉しく思っています。

・とても勉強になりました。ストレッチもやってみたいと思いました。また、機会があったら参加したいです。

・非常に勉強になり、又講座あれば聴きたい。

・非常に参考になりました。このような講座たびたび開催していただきたいです。

・私が期待していた話とは少し違いましたが、いい勉強になりました。ありがとうございます。始まる時間を１時間はやくしてほしい。そうすれば最後まで聞けるのに。

・とても勉強になりました。今後も開催されるようでしたら、また受講させていただきたいと思います。ありがとうございました。

・本日は、とてもためになりました。ありがとうございました。ストレッチ頑張って続けたいと思います。

・年をとるとしびれがある人が多いです。しびれについて今回の様な講演会を開いていただけるとうれしいです。今回はとても楽しかったです。内容が深く多いのは有難く思いましたが、理解しても忘れてしまうのは残念です。（80才）でも楽しい半日でした。ありがとうございました。

～一番心に響いた言葉、納得したこと～

①体の上に頭がなくなる（老人のすがた）②人類は250万年前から１万年前まで体を動かしていた。前屈みの生活をする人間の今、講師（3人の方）すべてよく聞く立場を意識してわかるように話して下さった、と感謝します。

図 1 リハビリサポートの広告

図 2 すこやかリハサポートの講座の様子

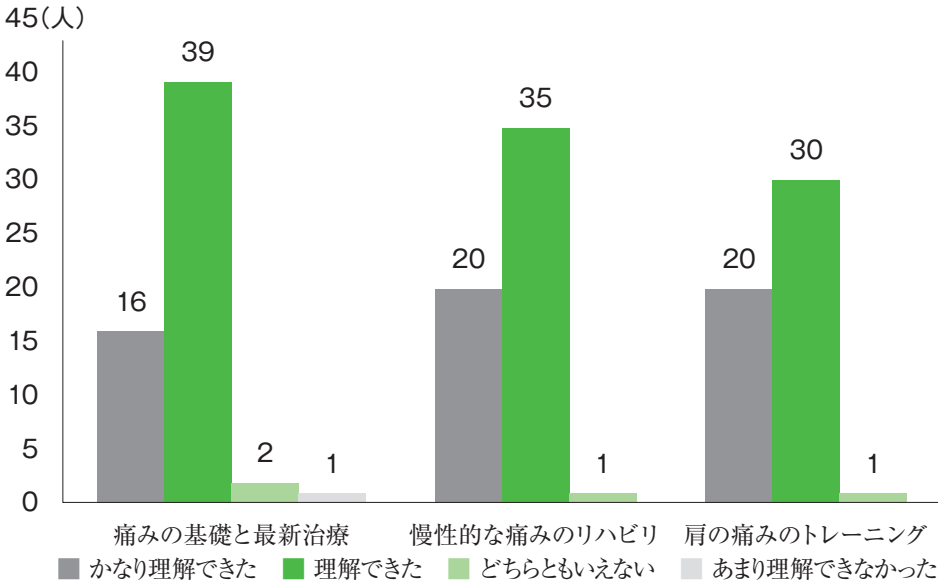


図 3 講座内容アンケート結果

6 考察とまとめ

アンケートから講座受講後の受講生の理解度は、おおよそ 87%以上であった。

受講後、痛みが改善した方がいた。今回、講義を通して受講生の痛みの知識が向上し、痛みを理解したことで痛みの不安感が減り、痛みを抑制した可能性を示唆した。受講生は、痛みの知識を学ぶことで痛みの機構を知り、日常生活における身体や脳の不安体験を減少できた可能性がある。さらに各講座の満足感も高い結果であった。自由記載は、講座開催に関する感謝の意や、痛みに負けない思考を得たと考えられた。以上より、今回の講座が地域在住の方々に役立てられ、本学で実施したこの講座が地域貢献に至っていると推察できた。痛みの知識は、日頃学ぶ機会がなく、今後も活動を継続する必要性を感じた。

今回の健康講座では、肩の痛みに焦点をあてた。すこやかな生活を送るためには、痛み改善は重要である。アンケートからもこのような講座を定期的に行なって欲しいという考えを持たれる参加者が多く、この講座の必要性が示唆された。健康講座を、地域の方々に受講していただくことで、健康寿命が延長する可能性がある。ゆえに、すこやかリハサポート健康講座を継続することで、この地域住民の方々のリハビリサポートができると考えられた。

7 未発表の場合は発表計画等

地域保健福祉実践研究センターが企画する報告会で発表する。

「浜松市で障害に対する差別をなくす条例づくり」の検討

田島明子*[1)]、川向雅弘[1)]、村上武敏[1)]、小出隆司[2)]、高木誠一[3)]、稲松義人[4)]、鈴木美絵[5)]、松波めぐみ[6)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]手をつなぐ育成会、[3)]浜松協働学舎
[4)]小羊学園、[5)]天竜厚生会、[6)]世界人権問題研究センター

1 はじめに

障害を持つ当事者の人権をめぐって国内は近年、大きな動きを見せている。2013 年は障害者差別解消法が成立し、2014 年に入り日本は障害者権利条約に批准をした。2016 年には障害者差別解消法が施行される。こうした流れを受け、各地方自治体において、障害者差別禁止条例が作られ始めている。千葉県が全国初の条例を作った後、北海道、岩手県、熊本県、八王子市、最近では京都府において「障害のある人もない人も安心して生き生きと暮らせる社会づくり条例」が京都府議会本会議にて可決成立した。

筆者が代表を務める浜松インクル―ジョン研究会（以下、研究会とする）は、平成 20 年に厚生労働省の委託を受けた地域研究事業を発端に集った障害福祉研究者、障害福祉に関わる支援者によって、インクルーシブな地域を創造するための研究組織として発足した。平成 21 年度には障害者権利条約について、平成 22 年度には当事者の声を聴くこと、23 年度は地域生活の在り方、24 年度は自立支援協議会のあり方について議論を行ってきた。今年度は、「障害当事者の意思決定支援」「障害者差別禁止法」についての議論を行い、2014 年 3 月には、「障害者権利条約の時代」と題して長瀬修氏（立命館大学）に基調講演をしていただき、「浜松に差別をなくす条例を作ろう！」というテーマでシンポジウムを開催した。

2014 年度は、研究会において、2014 年 3 月のフォーラムをベースとし、さらに「条例づくり」に向けた取り組みを行っていきたいと考えた。そのために、1）情報収集、2）情報共有、3）議論の場を持つ、の 3 つからなる取り組みを行った。情報収集とは、他県・市での条例づくりのポイントを把握し、浜松市内の障害を持つ当事者の経験してきた差別の具体的状況、差別に関する意識を把握することである。情報共有とは、浜松インクル―ジョン研究会の「条例づくり」に向けた取り組みを、インターネットを介して発信し、広く知ってもらうことである。議論の場を持つ、では 2014 年度は 2 回の機会を設けることで、具体的で実効性のある「条例づくり」に向けた議論を展開していきたいと考えた。これら情報収集、情報共有、議論の場を持つ、を有機的に連結させ、「浜松市において『条例づくり』の機運を高める」「より具体的で実効性のある『条例づくり』に向けた内容検討を行える」の 2 点が本研究事業における 2014 年の到達目標であった。

2 方法

1. 教育講演

「条例づくり」に向けた次の 3 点の取り組み、1）情報収集、2）情報共有、3）議論の場を持つ、の方法について以下に述べる。

（1）他県市の状況について情報収集を行なう。

①事前調査

2014 年 3 月に実施した第 9 回浜松フォーラムでは「他県市の条例づくりの紹介－浜松での取り組みのヒントに」と題して筆者から報告を行った。その際には、愛知県、千葉県、東京都八王子市の事例を取り上げた。

②京都府の状況

本研究における共同研究者である世界人権問題研究センターの松波めぐみは京都府における条例づくりの際の事務局を行っており、また研究者という立場でもあるため、京都府条例づくりの経過について丁寧に記録し、論文化もしている。松波氏を招き、京都府の条例づくりの状況について直接話を伺った。

③仙台市の状況

仙台市は、CIL たすけっとの杉山裕信氏（脳性麻痺による重度障害を有する）が中心となり、「条例づくり」に向けた活動を現在行っている。今回、仙台市にある CIL たすけっとへ筆者と共同研究者であり、浜松インクル―ジョン研究会会員である鈴木美絵とともに 2015 年 2 月 2 日に訪問し、事前に聴取したい内容としてお伝えしていた「発足の経緯」「活動内容」「メンバー」「市障害者施策推進協議会との関係」「条例づくり・地域支援協議会づくりの動き」「議員の協力はどのように得ているか、そのことにより得られるメリット」「協力を得ておくとよい人」「検討中の条例内容」「今後のスケジュール」を中心に、杉山氏にインタビュー調査を行った。

(2) 浜松市内の障害当事者の差別経験を把握するために、調査票を作成し、聴取を行う。

2. 情報共有

(1) 浜松インクル―ジョン研究会の「条例づくり」に向けた取り組みについて、HP を作成し、情報発信する。

3. 議論の場を持つ

(1) 1 回／月、定例で浜松インクル―ジョン研究会を実施する。

(2) 2014 年度内に、「条例つくり」をテーマに、学習会・フォーラムを開催する。

3 結果

1. 情報収集

(1) 他県市の状況把握

①事前調査

2014 年 3 月に実施した第 9 回浜松フォーラムでは「他県市の条例づくりの紹介－浜松での取り組みのヒントに」と題して、愛知県、千葉県、東京都八王子市の事例を取り上げた。

愛知県は、政治主導で条例づくりが行われるなか当事者団体に対しても内容検討の依頼があったりしたが、結局 3 党合意が得られず、失敗している。千葉県は、堂本知事のリーダーシップのもと、行政への当事者参画を強力に推し進めるなか、行政と民意が手を取り合う形で条例が成立した。八王子市は、障害当事者主導で条例がつくられた 1 つの事例として紹介した。

②京都府の取り組み

9 月の研究会の際に、世界人権問題研究センターの松波氏に浜松に来ていただき、京都府での条例づくりについてレクチャーしていただいた。京都府では、2009 年に障害種別を超えたネットワーク団体である「障害者権利条約の批准と完全実施をめざす京都実行委員会」が結成され、団体から条例をつくる要望書が京都府知事、市長に提出され、それを受けて 2012 年 1 月より京都府が検討会議を設置し、本格的な条例づくりがスタートした。京都府の条例の特徴として、女性＋障害（複合差別）の禁止が盛り込まれたことがある。その経緯について等内部にいたからこそ把握している情報を松波氏から情報提供いただいた。

③仙台市の取り組み

仙台市の取り組みについては、鈴木氏が 2015 年 3 月に実施した第 10 回浜松フォーラムにおいて「仙台での取り組みについて（報告）」と題して報告を行っているので、その報告内容から何点か抜粋し以下に記載する。

仙台市における「条例づくり」であるが、2009 年 10 月 21 日に「誰もが暮らしやすいまちづくりをすすめる仙台連絡協議会（条例の会仙台）」が発足し、活動を進めてきた。代表は先に述べた杉山氏であるが、2014 年 11 月現在で、財団法人仙台市障害者福祉協会、社会福祉法人仙台市社会福祉協議会など、団体会員が 25 団体である。仙台市では 2014 年に条例検討が仙台市障害者施策推進協議会に諮問され、現在では当事者団体と行政が協調しながら条例づくりが進行している。2014 年度の仙台市障害者施策推進協議会は、条例制定関係の会議と、通常の計画策定関係の会議の 2 段構成で会議を進めてきた。また、事務局会議、全体会議、フォーラム「誰もが暮らしやすいまちづくりフォーラム」、タウンミーティング「差別のない社会を考えるトークカフェ」、イベント開催（市民シンポジウム、学習会、ワークショップ、パネルディスカッション）、「仙台市障害者差別禁止条例骨子案」への提言、「精神科病院の病棟転換型居住系施設」に反対する緊急アピール、ニュースレターの発行など、取り組みが多岐に及び活発であることも分かった。

(2) 差別経験の把握

①調査票の作成

定例の研究会のなかで、差別経験を把握するための A4 で 4 枚の調査票を作成した。これには知的障害がある人でも読めるようにルビを振ったり、差別の種別について簡単な説明を入れたりした。また調査対象者の基本情報（性別、年齢、障害種別、手帳の有無）も把握できるようにし、見たり受けたりした体験やなにが変わると住みやすくなると思うか、といった質問に対して自由記述で回答できる欄を設けた。今後、事例収集を行っていく予定である。

②経験の聴取

研究会会員で、障害を持つ子供の親である 3 名が、自身の所属する団体で調査票を使用してみた。そうしたところ、ファシリテーターとなる人がグループで意見を聞きながら実施した方が意見が出やすいことがわかった。

2. 情報共有

(1) HP の作成

以下のような HP を作成し、浜松インクル―ジョン研究会の周知、学習会・フォーラムの告知を行った。

3. 議論の場を持つ

(1) 浜松インクル―ジョン研究会の実施

2014 年度の浜松インクル―ジョン研究会の実施状況は以下のとおりであった。毎月第 4 火曜日に 19 時～ 21 時まで、聖隷クリストファー大学図書館内グループ学習室で実施した。計 11 回の実施を行った。

実施月	内容	参加人数
4月	・3月22日に行われたフォーラムの反省・感想・課題等 ・今後研究会で行うこと ・9月予定の学習会について	13名
5月	・9月の学習会に向けての「条例」「差別」勉強	12名
6月	・中王子みのりさんのお話し	13名
7月	・CIL浜松の笠原賢二さんのお話し ・静岡での条例づくりの動きについて	10名
9月	・9月21日学習会の振り返り ・地域協議会体制整備事業の紹介 ・京都での条例づくりの過程の紹介 ・今後について	10名

実施月	内容	参加人数
10月	・常葉大学の羽田野真帆先生より「聴覚障害者（ろう者）に対する情報保障についての基礎知識」の講義	8名
11月	・差別事例収集のための調査票試案作成	8名
12月	・調査票使用感の報告 ・UD条例との比較検討	13名
1月	・3月フォーラムの内容検討 ・1月24日条例つくりフォーラムin静岡についての報告	10名
2月	・3月フォーラムについて最終確認	16名

(2)「条例つくり」をテーマにした学習会・フォーラムの開催

①学習会

2014年9月21日、13時～17時まで、「差別のない街をつくるために−浜松の条例づくりに向けて・野沢和弘さんを囲んでの勉強会」と題した勉強会をアクトシティ研修交流センター52研修交流室にて行った。野沢和弘氏は毎日新聞論説委員であるが、先に述べた千葉県での条例づくりの際の中心的メンバーであり、学習会では、条例づくりの際のエピソードや条例を作ることの意味についてお話しくださった。また、野澤氏の講演の他、浜松市に居住する障害当事者であり浜松インクルージョン研究会会員の笠原賢二、中王子みのりからも、浜松で住むなかで感じてきたこと等について話をして頂いた。参加者は42名であった。

②フォーラム

2015年3月15日、13時～17時まで、「だれもが安心して暮らしやすい地域をつくるために」～浜松に差別をなくす条例をつくろう！」と題した第10回浜松フォーラムを、聖隷クリストファー大学で実施した。今回は、「障害者差別禁止条例がなぜ必要か？」と題した基調講演を、2015年1月に発足した「静岡県障害者差別禁止条例づくりの会」の中心メンバーである、アシストMIL（ミル）事務局長の岩本肇氏、静岡県条例づくりの会事務局の大川速巳氏にお願いした。告知が直前になったこともあり参加者は28名と若干少なかったが、障害当事者の方が多く参加してくださったフォーラムになった。その他、研究会会員で、浜松地区肢体不自由児親の会理事長の里あゆ子より先に述べた差別経験調査票を用い聴取した親の会の皆さんの経験について報告があった。

4 考察

本研究計画において、地域への貢献度の評価について2点あげていた。1点目が「条例づくりの機運が高まったかの評価」である。つまり、2014年度に実施する浜松フォーラムへの参加人数（特に障害当事者の参加人数）が2013年度の参加人数に比べてどうかで評価を行うこととした。2点目が「2014年度に行うフォーラムがより具体性のある条例づくりに向けた内容となっている」である。

まず1点目であるが、第9回浜松フォーラムの参加者が42名、学習会の参加者が42名、第10回浜松フォーラムは28名の参加者であり、参加者数の減少はあったが、第10回浜松フォーラムでは約1/3の10名程の方が障害を持つ当事者であり、障害を持つ当事者の参加率は増加していた。2点目であるが、他県市の状況把握、調査票作成等行った中で、今後「条例づくり」に取り組むうえでの課題はより明確になった。また、静岡県での条例づくりの動きとも連動するようになったので、2015年度は浜松地区での差別事例の経験について作成した調査票を用いて聴取をしていく予定である。

発表学会については、聖隷クリストファー大学社会福祉学会を予定している。

ソーシャルワーク実習における実習プログラムとスーパービジョンの有機的な連携のあり方

福田俊子*[1)]、小林 拓[2)]
[1)] 聖隷クリストファー大学、[2)] 社会福祉法人誠信会

1 背景・目的

2007 年の「社会福祉士及び介護福祉士等法の一部を改正する法律」に基づき、社会福祉士養成課程の教育が大幅に見直された。とりわけ実習教育には、大きな変更が加えられ、実習プログラミング論が導入されることによって、ソーシャルワーク実践に必要とされる知識・技術を網羅的に修得することがより強調されるようになった。こうした教育内容の改正によって、一定の教育効果が生まれている一方で、知識・技術を詰め込む教育になりかねないといった、いくつかの批判もなされている（深谷：2010、中村：2011）。

医療職とは異なり、社会福祉士養成校の学生は、職業選択のプロセスを経てから入学するわけではない。むしろ多くの学生は、入学後に学びを重ねながら進路を決定するため、実習教育が実質的に職業選択の場となっている場合が少なくない。

学生がソーシャルワーカー（以下、ワーカー）の仕事を肯定的に捉えながら、専門職としての知識や技術を、ある程度身につけることを可能とする実習教育をどう実現すればよいのか。本研究では、こうした社会福祉士養成の現状に見合った実習教育のあり方を、実習プログラムとスーパービジョンの有機的な連携のあり方という視点から検討することを目的とする。

2 方法

本研究では、ソーシャルワーク実習を経て、卒業後にワーカーとして働くことを選択した本学卒業生 A 氏による障害者支援施設（以下、D 施設）における実習体験を取り上げる。A 氏の 3 年次におけるソーシャルワーク実習を素材とし、本人及びその実習のスーパーバイザー（以下、バイザー）であった実習先職員 B 氏（臨床経験年数 7 年）、C 氏(臨床経験年数 15 年）に対し、90 分程度のインタビュー調査を 2 回ずつ実施した。B 氏及び C 氏に対しては、初回はグループで、2 回目は個別にインタビューした。

A 氏に対しては、卒業後 1 年が経過した時点において、本人が重要と感じている実習体験を中心に聞き取り、その意味づけの変化を明らかにした。B 氏及び C 氏には、現時点で印象に残っている A 氏の実習内容や、実習プログラムやスーパービジョンのねらいなどについて尋ねた。

録音された音声データは全てテキスト化し、質的記述的方法を用いて分析した。なお、調査は本学の研究倫理委員会の承認を得た上で実施された。

3 結果・考察

1. A 氏の語り

1）利用者によって「ふりまわされた」体験の意味づけの深化

ソーシャルワーク実習のプログラムは、「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」という三段階の過程を経ながら進行するわけであるが、D 施設におけるプログラムの概要は表 1 の通りである。

こうした実習プログラムを経験した上で、A 氏が在学中に書いた実習総括レポートの主たるテーマは、利用者に「ふりまわされる体験」を通して、否定的な感情表出が可能となり、実生活でも自分らしく人とかかわれるようになったという「『個人的自己』の大きな変容」であった。

しかし今回調査では、ワーカーとして働く今、沸き起こる感情の処理に困難を抱えている語りをはさみながら、本体験を「専門的自己」として利用者と信頼関係を形成する上で重要となる「意図的な感情表出」の課題として語り、その意味づけは深化していることが明らかとなった。

具体的には、学生であった当時においては、本体験を「個人的自己」の感情表出に関する自由度が高まったとする結論で終わっていたのであるが、今回調査の語りでは、利用者からの不適切な関わりにまつわる自分自身の不快な感情を利用者本人に対し率直に伝えたことは、実習生の自分が「人として」「一緒の立場」に立って「関係性」を構築することができたかもしれないと意味づけているのである。

表 1　D 施設における実習プログラムの概要

職場実習 （概ね第 1 週目）	●施設の概要を理解する ●日課の流れを理解する ●日中活動の様子を見学、体験する ●施設に所属している職種を知る ●各職種にインタビューを行い、それぞれの役割を知る ●利用者とコミュニケーションを図る ●スーパービジョンを行う
職種実習 （概ね第 2 週目）	●サービス管理責任者・生活支援員としての社会福 祉士の役割を知る ●会議、面接に同席、見学する ●利用者とコミュニケーションを図る ●スーパービジョンを行う
ソーシャルワーク実習 （概ね第 3 週目）	●面接のロールプレイを行う ●権利擁護を学ぶ ●個別支援計画作成に関するプロセスを知る ●特定利用者のアセスメント、個別支援計画を作成する ●利用者とコミュニケーションを図る ●スーパービジョン、事後オリエンテーションを行う

2）「モデル」としてのワーカー像が前景化する語り

A 氏は、自分と「利用者」という「二者関係」を通した「自己覚知」に焦点をあてて実習を総括したが、今回調査では B 氏及び C 氏との関わりに主眼をおいた語りへと変化し、自分、バイザー、それに利用者や他職種等を加えた「三者関係」を通して学習した「ワーカーの役割」について詳細に語った。すなわち、両氏にまつわる今回調査の語りは、「実習指導者」として、いかに自分が指導を受けたかではなく、「ワーカー」として、どのように組織のなかでふるまっていたかという内容へと変化したのである。

B 氏及び C 氏は、A 氏にとってワーカーの「モデル」となっている。実習中は、B 氏が生活支援全般にかかわる実習指導、例えば個別支援計画作成のスーパービジョンを担当し、C 氏がケア会議といった他職種や他機関との連絡・調整に関する実習プログラムを作成し、その指導にあたるという役割分担がなされていた。

B 氏による実習ノートのコメントを読み返した A 氏は、利用者との関係性が「支援する側、される側になってはいけない」というコメントが今は非常に重要だと認識しているという。一方、コメントを書いた B 氏は、職場実習では「無意識に、障害があるからこれができないとか、福祉の仕事って弱い人を助けてあげることになって

しまわないことを、まずは職場実習の中でわかってもらいたいと考えていた」と語った。また、B 氏の記憶には残っていないものの、A 氏は先の利用者との関係に「行き詰まって」いた際に、B 氏からの働きかけがきっかけとなって、2 時間以上、話を聴いてもらえたことで、利用者との関係の見直しができたことも、自分にとってとても印象に残る出来事であったとした。

次に C 氏については、利用者本人の意向が踏まえられないままに、家族の意向が優先された話し合いが進められていたケース担当者会議において、C 氏が異議を唱え、話し合いの流れを大きく変えた実習場面が、A 氏にとっては、心を動かされる出来事であったとし、今でも忘れられない体験になっているという。当時、A 氏は C 氏のふるまいを「カッコいい」とだけでしか認識していなかったと語った。しかし、今改めてこの実習場面を振り返った A 氏は、こうした話の流れを急激に変えようとする行為は、「その後における利用者や家族、他職種との関係が破壊されるかもしれないリスクを背負うことにもなるため、今の自分にはできないことだ」と意味づけるようになっている。

以上のように、卒業後にワーカーとして働くことになった A 氏にとって、B 氏は「直接支援系」の、C 氏は「間接支援系」の「ワーカーとしてのモデル」となり、今回調査は、そのモデルとしてのふるまいが前景化した実習体験の語りとなった。

2. B 氏・C 氏による「育てられた体験」にかかわる語り

B 氏及び C 氏は、共に「実習指導は楽しい」と口を揃えて語り、なかでも C 氏は実習指導をすることで「自分を見つめ直すことができるし、学生も成長するし、二倍の楽しさと効果がある」という。調査では、A 氏が印象に残っていると語った実習場面への関与を中心に聞き取りをはじめたのだが、途中から両氏はともに「ワーカーとして育てられた体験」、すなわち実習指導者としての基盤を形成する上で影響を与えた体験を詳細に語った。こうした体験が、両氏によるスーパービジョンを生成していると捉えられたため、以下、その語りを記述する。

1）C 氏の語り

C 氏は専門職である前に「人としてどのような感情を抱いたか」を自覚することが大切であるから、スーパービジョン関係でそのような感情を抱いたことについて、率直に話せることを重視する。そして、こうした実習指導の姿勢がどのように形成されてきたのかについて、詳細に語った。

社会福祉系大学ではなく文系の大学を卒業し、偶然、所属する法人に勤務することになった C 氏は、入職当初の自分は「福祉のふの字も知らない」ままに「ひどい職員だった」という。例えば、利用者と話をする際に座って視線を合わせることはせず、立ったままだったし、「面倒をみることだけが仕事だ」と思っていた。また、入職直後の法人内施設実習では、「何をしていいかわからない」ために孤立したし、緊張もした。だからこそ、実習生が実習をはじめた当初に緊張感は良く理解できるとし、冗談を言って、それを和らげるように心がけているという。

そして C 氏が入職した後に、ある先輩の社会福祉士がちょうど配属され、そこで社会福祉士の魅力を伝えてくれたのだとする。その先輩は黙っているだけでも利用者が集まってくる様子をみて、利用者から信頼されていることを感じとったり、利用者の視点や権利擁護を重視した特色ある支援を実現しないかと話しかけてもらったり、その先輩からたくさんのことを学び、社会福祉士の資格を取得することになったのだと語った。さらに、その先輩にもう一人の社会福祉士の資格を有する先輩も加わり、職場だけでなくプライベートでも一緒の時間を過ごすなかでも、興味深い話をきかせてもらったことで触発されるものがあった。つまり、A 氏が B 氏及び C 氏の実習指導を通して、ワーカーとしての仕事の魅力を感じとったのと同様、C 氏も先輩ワーカーの働きかけに「巻き込まれること」よって、ワーカーの仕事を選択することになったのであった。

先に A 氏が「ワーカーの仕事はカッコいい」と感じた会議について、C 氏は「きれい事言ってると言われるかもしれないが、利用者本人の思いに、必ず立ち返って、そこを見つめ直して、実現できないかもしれないけれど、ちょっとは寄り添うのが、社会福祉士のできること」だと語った。

2）B 氏の語り

B 氏は入職してから 6 年間、C 氏と同じ職場で仕事をしながら、C 氏によって育てられ、ワーカーとして仕事することを選択するようになったと語る。中でも入職 2･3 年目に、職員間で板挟みの状態となり、「行き詰まって」誰にも相談できずにいた際に、C 氏から声をかけられ、「失敗しても、自分がフォローするから、やりたいようにやったらいい」と言われたことが、今でもとても印象に残っている出来事であったとする。

だから、実習指導においては、「自分の学んできたものを実践すれば全て利用者さんのためになるわけではなく、利用者や家族も悩んでいるし、支援者自身も悩む。一緒に悩んで、利用者が自分らしくなれるのだと実習で感じてほしいので、あえて悩んでもらいたい。失敗してみてすごく印象に残るし、もっとこうすればよかった、ああすればよかったと自分自身も仕事の中で思うので。失敗体験だけで終わるのも、実習がマイナスのイメージだけで終わらにないように、一回失敗してもらって、そこからどうしていったらいいかというのを一緒に考えていける実習がいいと思っている。」と語った。

4 結論

「社会福祉」ではなく、「ワーカー」を職業として選択する契機となったのは、A 氏の場合は実習先、B 氏及び C 氏の場合は職場であった。こうした場の違いはあるものの、三者に共通しているのは、臨床に「巻き込まれ」て、「失敗した」り「行き詰まった」りする体験を、周囲の職員によってサポートされたという体験である。これは、従来の「学習」の構造は「獲得」にあるのではなく、他者や共同体などとの絶えざる相互交渉であるとする「正統的周辺参加論」に立脚し、「学習」のあり方を根源的に再考した J.Lave and E.Wenger（1991）による「実践共同体」の概念と合致する。つまり、臨床という場で利用者や職員との関係などに「巻き込まれる」こと自体が学習につながっているという考え方である。また、三氏の語りは、「巻き込まれる」ことが単なる学習だけでなく、職業選択につながることも示している。

A 氏による「巻き込まれる体験」の意味づけが深化してきていることは、本体験が、当時よりも色濃く A 氏ののなかに残り続け、意味づけの更新を A 氏に促していることを示している。と同時に、さまざまな実習体験の中でも、他の体験は捨象されていくなかで、本体験が前景化し、A 氏にとって重要な体験となっているのである。

深谷（2010：138）が、「ソーシャルワークの対象が医療のように人間の身体ではなく、多様な人々の社会的機能である以上、そして方法が手術や投薬ではなく多様なレベルでの社会的介入である以上、確立され標準化されている度合いが医療のそれとはまったく異なることが指摘できよう」と述べ、網羅的な実習プログラムの展開は不可能であると指摘するように、実習プログラムを作成する上で重要なことは、学生が臨床に「巻き込まれるような状況を設定すること」であり、そうした体験をサポートするスーパービジョン及びスーパービジョン体制を整備することなのである。

＜引用文献＞

深谷美枝（2010）「実習プログラムに関する一私論」明治学院大学社会学・社会福祉学研究（133), 133-158, 2010-03
Lave . J and Wenger. E(1993) Situated Learning(＝1994『状況に埋め込まれた学修 正統的周辺参加』産業図書)
中村剛（2011）「ソーシャルワーク実習プログラム試論」関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 15（1), 37-47, 2011-09